

# 最澄鈔『法華論科文』訳註

武本 宗一郎

## 一 はじめに

最澄鈔『法華論科文』は、世親造『妙法蓮華經(論)憂波提舍』(以下、『法華論』)の分科及び大略を記した小品の著述である。本書は、序品及び方便品とそれ以降では、記述内容の性格が異なる。すなわち、序品及び方便品の積では、『法華論』に説かれる教説と『法華論』所引の經文、そして『法華經』の經文を会釈することに重点が置かれている。また、序品の積には、智顛説『法華文句』への著しい目配りがある。譬喩品以降の記述は、ほぼ『法華論』からの引用文で占められていて、序品及び方便品の積と比べると、希薄な内容となっている。なお、本書に関して、果たして真撰であるかという問題も含め、その由来は詳らかではない。『可透録』等の目録類に最澄の撰述として、本書の名目が載ることに加え、偽撰とする確たる証拠も

ないため、現状では、真撰として取り扱われている。本稿もこれに従うが、今後、これが否定される可能性もありえることを付記しておきたい。

本書についての概説には、「清田 一九八〇」、「高崎 一九七七」があり、本書自体を扱った先行研究には、「桑谷 一九九四」、「桑谷 一九九五」があるものの、必ずしも研究が進んでいるとは言えない。「武本 二〇二〇 a」、「武本 二〇二〇 b」において指摘してきたように、徳一との論争に関係する最澄の著作には、『法華論』が対象となる議論が数多くある。したがって、最澄の思想を十全に明らかにするためには、それらの議論と『法華論科文』を対照しつつ、研究を進める必要がある。本訳註は、このような展望のもとに試みられている。

## 凡例

- (一) 『法華論科文』の底本としては、伝教大師全集卷三所収本を用いた。
- (二) 訳註は、本文、訓読、註釈、通釈の順で行い、適宜、校訂や解説を挟んだ。ただし、譬喩品以降の記述は、ほぼ『法華論』からの引用のため、通釈を省略した。校訂は、基本的には本文を尊重し、著しく文意が通じない場合や底本の頭註に従ったほうが良いと思われる場合に限り、原典等を参看しつつ改訂・削除・補入した。
- (三) 使用する『法華論』は、便宜上、大正蔵所収の菩提留支等による訳本に依った。

四本文で引用される『法華経』の経文、『法華論』に引用される『法華経』の経文は、紙面が繁雑になるのを恐れて、訓読を行うことはしていない。また、本文に引用される『法華経』の経文は、いずれも大正蔵九卷所収本に典拠を見出すことができるため、典拠を示していない。

(五)註釈等で引用する漢文については、紙面が繁雑になるのを恐れて、訓読を行わない。

(六)引用文には「」を付して構文を明らかにした。

(七)原則として字体は新字体に、仮名遣いは現代仮名遣いに統一した。

(八)底本の割註はすべて採用し、本文と同様に記載した。

(九)伝教大師全集卷三所収本の『法華論科文』の冒頭に載る本書の内容を略示した図、いわゆる科文図は省略した。

### 参考文献

「大竹二〇一一」大竹晋校註『新国訳大蔵経釈経論部法華経論・無量寿経論他』大蔵出版、二〇一一年  
「清田一九八〇」清田寂雲「法華論と法華論科文について」天台学会編『伝教大師研究』早稲田大学出版部、一九八〇年

「金二〇一一」金炳坤「法華章疏における五分釈の展開」『印仏研』、五九卷二号、二〇一一年

「金二〇一二」金炳坤「西域出土法華章疏について」『印仏研』、六一卷一号、二〇一二年

〔桑谷 一九九四〕 桑谷祐顕 「伝教大師と『法華論』」 大久保良順先生傘寿記念論文集刊行会編 『仏教文化の展開…大久保良順先生傘寿記念論文集』 山喜房仏書林、一九九四年

〔桑谷 一九九五〕 桑谷祐顕 「『守護国界章』の研究…伝教大師の法華論解釈という一面から」 『天台学論集』第四集、天台宗務庁、一九九五年

〔高崎 一九七七〕 高崎直道 「法華論科文解題」 鈴木学術財団編 『日本大藏経』第九七卷（解題一）、一九七七年

〔武本 二〇二〇 a〕 武本宗一郎 『『守護国界章』における『法華論』積義とその系譜』 『東洋の思想と宗教』第三七号、二〇二〇年掲載予定

〔武本 二〇二〇 b〕 武本宗一郎 「最澄による『法華論』方便品の五分科積義について」 『印仏研』六八卷二号、二〇二〇年掲載予定

〔平井 一九九一〕 平井宥慶 「無名の『法華経』研究者たち」 塩入良道先生追悼論文集刊行会編 『天台思想と東アジア文化の研究…塩入良道先生追悼論文集』 山喜房仏書林、一九九一年

## 一一 本文

法華論科文

大唐習業沙門最澄 鈔

序品

§ 1-1 第一序分成就

【本文】

論釈<sup>二</sup>法華序品<sup>一</sup>科文第一。

序品経、論分<sup>二</sup>七段<sup>一</sup>。経從<sup>二</sup>「如是我聞」<sup>一</sup>、至<sup>二</sup>「耆闍崛山中」<sup>一</sup>、論名為<sup>二</sup>第一序分成就<sup>一</sup>。疏分為<sup>二</sup>五句<sup>一</sup>。

【訓読】

論の法華の序品を釈する科文第一。

序品の経は、論に七段に分かつ<sup>(1)</sup>。経の「如是我聞」從り、「耆闍崛山中」に至るまでは、論に名づけて第一に序分成就と為す<sup>(2)</sup>。疏には分けて五句と為す<sup>(3)</sup>。

【註釈】

(1) 論に七段に分かつ 『法華論』卷上(大正二六・一頁上中)に、「初第一品、示<sup>二</sup>現七種功德成就<sup>一</sup>。

此義<sup>レ</sup>知。何等<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>七。一者序分成就、二者衆成就、三者如来欲說法時至成就、四者依所說法威儀隨順住成就、五者依止說因成就、六者大衆現前欲聞法成就、七者文殊師利菩薩答成就。」とある。

(2) 論に名づけて第一に序分成就と為す 『法華論』卷上(大正二六・一頁中)。

(3) 疏には分けて五句と為す 智顛說『法華文句』卷一上(大正三四・三頁上)に「序有<sup>三</sup>通別。從<sup>二</sup>

「如是」去、至<sup>二</sup>「却坐一面」、通序也。從<sup>二</sup>「爾時世尊」去、至<sup>レ</sup>品、別序也。通序通<sup>三</sup>諸教、別序別<sup>三</sup>一經。通序為<sup>二</sup>五或六或七<sup>一</sup>云云。」とあり、通序にあたる「如是我聞」から「却坐一面」までの文を五節、または六節、または七節に句切るとしている。湛然述『法華文句記』卷一中(大正三四・一五八頁下)の「云<sup>二</sup>「或五六七」者、五者如<sup>レ</sup>文、合<sup>二</sup>仏及処。六則離<sup>二</sup>仏及処。七則離<sup>二</sup>我與聞<sup>一</sup>。」という記述によると、五節ならば「①如是我聞、②一時④仏住王舎城耆闍崛山中。⑤与大比丘衆く却坐一面。」となり、六節ならば「①如是我聞、③一時④仏住王舎城耆闍崛山中。⑥与大比丘衆く却坐一面。」となり、七節ならば「①如是我聞、④一時⑤仏住王舎城耆闍崛山中。⑦与大比丘衆く却坐一面。」となる。したがって、最澄は、ここで「如是我聞、一時仏住王舎城耆闍崛山中。」までの經文を五句に分けることから、『法華文句』の「或六」の説を採用していることがわかる。なお、「或六」の説については、湛然述『法華經大意』(続藏一・四三・九四丁左上)にも、「初序有<sup>レ</sup>通有<sup>レ</sup>別。初序有<sup>レ</sup>六。一所聞之法体、即「如是」是。二能持之人、即「我聞」是。三聞持之時、「一時」是。四聞持之所從、即「仏陀」是。五聞持之处、即「王舎城耆山」是。

六聞持之伴、即「与大比丘衆」去是也。」とある。

【通釈】

『法華經』序品の經文は、『法華論』においては、七段（七成就）に段落分けされる。『法華經』の「如是我聞」から「耆闍崛山中」までの經文は、『法華論』では、七成就の第一の序分成就に当たる。『法華文句』では、この箇所の經文を通序とし、「①如是②我聞③一時④仏⑤住王舎城耆闍崛山中」の五句に分けている。

【解説】

「大唐習業沙門最澄」という撰号からは、『法華論科文』の述作時期が早くとも入唐後であることが知られる。

§ 1-2 第二衆成就

【本文】

經從<sup>二</sup>「与大比丘衆」、至<sup>二</sup>「尊重讚歎」、論名為<sup>二</sup>第二衆成就。疏忽<sup>二</sup>二句。初從<sup>二</sup>「与大比丘衆」、至<sup>二</sup>「退坐一面」、疏意為<sup>二</sup>通序第六一句。次從<sup>二</sup>「爾時世尊」、至<sup>二</sup>「讚歎」、疏意為<sup>二</sup>別序第一衆集序。論

依<sub>二</sub>衆集威儀<sub>一</sub>、入<sub>二</sub>衆成就<sub>一</sub>。疏依<sub>二</sub>恭敬尊重讚歎義<sub>一</sub>、開為<sub>二</sub>別序衆集序<sub>一</sub>。各依<sub>二</sub>義<sub>一</sub>故、論与<sub>レ</sub>疏不<sub>二</sub>相違<sub>一</sub>。

### 【訓読】

經の「与大比丘衆」従り、「尊重讚歎」に至るまでは、論に名づけて第二に衆成就と為す。疏には二句に惣ぶ。初に「与大比丘衆」従り、「退坐一面」に至るまでは、疏の意には通序の第六の一句と為す。次に「爾時世尊」従り、「讚歎」に至るまでは、疏の意には別序の第一の衆集序と為す。論は衆集威儀に依りて、衆成就に入る。疏は恭敬尊重讚歎の義に依りて、開して別序の衆集序と為す。各一義に依るが故に、論と疏とは相違せず。

### 【註釈】

- (4) 論に名づけて第二に衆成就と為す 『法華論』卷上(大正二六・一頁中〜二頁下)。
- (5) 疏には二句に惣ぶ (一)ここでは、通序の第六句(「与大比丘衆」却坐一面)※註(3)参照)と別序の第一の衆集序(「爾時世尊、四衆困遶、供養恭敬、尊重讚歎」)を指して二句としている。衆集序については、『法華經大意』(続藏一―四三・九四丁左上〜左下)に「別序、約<sub>レ</sub>中、五序。従<sub>二</sub>「爾時世尊、四衆」下、訖<sub>二</sub>「尊重讚歎」<sub>一</sub>、第一<sub>二</sub>明集衆序<sub>一</sub>。」とある。
- (6) 疏の意には通序の第六の一句と為す 註(3)参照。



(7) 疏の意には別序の第一の衆集序と為す 註(5)参照。別序については、『法華文句』卷二下(大正三四・二六頁中下)に、「爾時世尊」下、訖<sub>レ</sub>品、名<sub>二</sub>別序<sub>一</sub>。文為<sub>レ</sub>五。一衆集、二現瑞、三疑念、四発問、五答問。」とある。

(8) 論は衆集威儀に依りて、衆成就に入る 衆集威儀について、『法華文句』卷二下(大正三四・二六頁下)には、「就<sub>二</sub>衆集<sub>一</sub>又二。初衆集威儀、次衆集供養。法華論目<sub>レ</sub>此、為<sub>二</sub>威儀如法住<sub>一</sub>。」として、別序の第一の集衆序には、衆集威儀と衆集供養があり、『法華論』では威儀如法住成就と名づけると記述されている。『法華論』卷上(大正二六・一頁中)には、「衆成就者、有<sub>二</sub>四種義<sub>一</sub>故、成就示現、応<sub>レ</sub>知。何等為<sub>レ</sub>四。一者数成就、二者行成就、三者撰功德成就、四者威儀如法住成就。」とあるように、威儀如法住成就は衆成就に摂められている。以上から、最澄は「論は衆集威儀に依りて、衆成就に入る」と記述している。

### 【通釈】

『法華経』の「与大比丘衆」から「尊重讚歎」までの経文は、『法華論』の七成就の第二の衆成就に当たる。『法華文句』では、この箇所を通序の第六句(「与大比丘衆<sub>レ</sub>却坐一面<sub>一</sub>」)と別序の第一の衆集序(「爾時世尊、四衆围绕、供養恭敬、尊重讚歎<sub>一</sub>」)の二句に分けている。『法華論』は、衆集威儀によって衆成就とし、『法華文句』は恭敬尊重讚歎によって衆集序とする。両書は、それぞれ同一の義に立脚して

いるため、相違することはない。

### 【解説】

詳しくは、註(8)に記したが、最澄は、『法華論』と『法華文句』の『法華經』釈義に相違がないことを論証する。この姿勢は『法華論科文』の節々に見られる。また、衆成就を開くと、数成就・行成就・撰功德成就・威儀如法住成就の四つの成就があり、このうち、行成就の内容に関して、『守護国界章』巻中之中(伝全二・四三四頁〜四四七頁)で議論が展開される。

### § 1-3 第三如来欲說法時至成就

#### 【本文】

經從<sup>二</sup>「為諸菩薩」、至<sup>二</sup>「仏所護念」、名為<sup>二</sup>第三如来欲說法時至成就。疏名為<sup>二</sup>別序之第二現相序。問。此說尤六瑞元首。

#### 【訓読】

經の「為諸菩薩」従り、「仏所護念」に至るまでは、名づけて第三に如来欲說法時至成就<sup>(9)</sup>なり。疏には名づけて別序の第二の現相序と為す<sup>(10)</sup>。問う。此の説は尤も六瑞の元首なり。

【註釈】

(9) 第三に如来欲説法時至成就なり 『法華論』卷上(大正二六・二頁下〜三頁上)。『法華文句記』卷一上(大正三四・一五三頁中)には、「此法門、初第一品、明<sup>二</sup>七種功德成就。一者序成就、二者衆成就。三者從<sup>二</sup>「為諸菩薩、説大乘經」去、欲説時至成就。」とあり、『法華經』に成就が配されている。

(10) 疏には名づけて別序の第二の現相序と為す 『法華文句』卷二下(大正三四・二七頁上)に「從<sup>二</sup>

「為諸菩薩、説大乘經」下、訖<sup>二</sup>「以仏舍利、起七宝塔」、是現相序。」とある。

【通釈】

『法華經』の「為諸菩薩」から「仏所護念」までの經文は、『法華論』の七成就の第三の如来欲説法時至成就に当たる。『法華文句』では、この箇所を別序の第二の現相序とする。

【解説】

「問う。此の説は尤も六瑞の元首なり。」以下には、脱文があると思われる。おそらく、現相序の総説、或いは、現相序に説かれる六瑞のうち、第一の説法瑞についての言及があったと考えられる。

§ 1-4 第四所依說法威儀隨順住成就

【本文】

經從<sup>二</sup>「仏説此経已<sup>一</sup>」、至<sup>二</sup>「一心觀仏<sup>一</sup>」、論名為<sup>二</sup>第四所依說法威儀隨順住成就<sup>一</sup>。疏分為<sup>二</sup>四瑞<sup>一</sup>。經從<sup>二</sup>「仏説此経已<sup>一</sup>」、至<sup>二</sup>「身心不動<sup>一</sup>」、名為<sup>二</sup>第二入定瑞<sup>一</sup>。經從<sup>二</sup>「是時天雨<sup>一</sup>」、至<sup>二</sup>「及諸大衆<sup>一</sup>」、名為<sup>二</sup>第三雨花瑞<sup>一</sup>。經從<sup>二</sup>「普仏世界、六種震動<sup>一</sup>」、名為<sup>二</sup>第四地動瑞<sup>一</sup>。經從<sup>二</sup>「爾時會中<sup>一</sup>」、至<sup>二</sup>「一心觀仏<sup>一</sup>」、名為<sup>二</sup>第五大衆心喜瑞<sup>一</sup>。

【訓読】

經の「仏説此経已」従り、「一心觀仏」に至るまでは、論に名づけて第四に所依說法威儀隨順住成就と爲す<sup>(1)</sup>。疏には分けて四瑞と爲す<sup>(2)</sup>。經の「仏説此経已」従り、「身心不動」に至るまでは、名づけて第二に入定瑞と爲す<sup>(3)</sup>。經の「是時天雨」従り、「及諸大衆」に至るまでは、名づけて第三に雨花瑞と爲す<sup>(4)</sup>。經の「普仏世界、六種震動」従り、名づけて第四に地動瑞と爲す<sup>(5)</sup>。經の「爾時會中」従り、「一心觀仏」に至るまでは、名づけて第五に大衆心喜瑞と爲す<sup>(6)</sup>。

【註釈】

- (11) 論に名づけて第四に所依說法威儀隨順住成就と為す 『法華論』卷上(大正二六・三頁上中)。『法華文句記』卷一上(大正三四・一五三頁中)には、「四從」「說是經」去、名<sub>二</sub>所說法隨順威儀住成就<sub>一</sub>とあり、『法華經』に成就が配されている。
- (12) 疏には分けて四瑞と為す 四瑞とは、此土の六瑞(說法瑞・入定瑞・雨花瑞・地動瑞・衆喜瑞・放光瑞)のうち、第二入定瑞・第三雨花瑞・第四地動瑞・第五大衆心喜瑞を指し、『法華文句』卷二下(大正三四・二八頁上)に解説される。
- (13) 第二に入定瑞と為す 『法華文句』卷二下(大正三四・二八頁上中)。
- (14) 第三に雨花瑞と為す 『法華文句』卷二下(大正三四・二八頁中下)。
- (15) 第四に地動瑞と為す 『法華文句』卷二下(大正三四・二八頁下)二九頁上)。
- (16) 第五に大衆心喜瑞と為す 『法華文句』卷二下(大正三四・二九頁上)。

【通釈】

『法華經』の「仏説此經已」から「一心觀仏」までの經文は、『法華論』の七成就の第四の所依說法威儀隨順住成就に当たる。『法華文句』では、この箇所を入定瑞・雨花瑞・地動瑞・衆喜瑞の四瑞に当てる。

§ 1-5 第五依止説因成就

【本文】

經從「爾時仏放」、至「起七宝塔」、論名為「第五依止說因成就」。疏分為「七瑞」。經「爾時仏放」、至「阿迦尼咤天」、名為「第六如來放光瑞」。已上六瑞、此土所現故、名為「此土六瑞」。

問。何故論此句不入成就。

答。此放光瑞、通自土・他土。論依他土義邊、入後成就。疏依自土義邊、入六瑞內。

問。何以得知放光瑞通自他土耶。

答。彌勒發問偈云「眉間白毫、大光普照」。此二句明「此土放光」。又「眉間光明、照于東方」等、明他土所放。故知、放光瑞通自他土。

問。此放光瑞、已入此土瑞。他土六瑞何。

答。經從「於此世界」、至「六趣衆生」、第一名為「他土見下瑞」。經「又見彼土現在諸仏」、第二名為「他土見上瑞」。經「及聞諸仏所說經法」、第三名為「他土聞法瑞」。經從「并見彼諸」、至「得道者」、第四名為「他土見人瑞」。經從「復見諸菩薩」、至「行菩薩道」、第五名為「他土見始瑞」。經從「復見諸仏」、至「起七宝塔」、第六名為「他土見終瑞」。

問。瑞相本論奇異。說經・入定、仏之恒儀。又他方見物、不足為奇。何說經・入定、并見他方等、為瑞相耶。

答。說法雖竟、時衆不散、肅有所待。故知、前之說肇衆來集、待於後聞。此事奇特、與常說異。

何意非<sub>レ</sub>瑞。雖<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>開定<sub>一</sub>、意在<sub>二</sub>合定<sub>一</sub>。与<sub>二</sub>常入定<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>異。何意非<sub>二</sub>瑞相<sub>一</sub>耶。又文殊引<sub>三</sub>古仏六瑞<sub>一</sub>、皆為<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>。若昔非<sub>二</sub>瑞相<sub>一</sub>、何以証<sub>レ</sub>今。今古同然。説<sub>レ</sub>經故得<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>定。入<sub>レ</sub>定故得<sub>二</sub>雨花動<sub>レ</sub>地。雨花動<sub>レ</sub>地故得<sub>二</sub>大衆心喜<sub>一</sub>。大衆心喜故得<sub>二</sub>如来放光<sub>一</sub>。如来放光故得<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>他土異相<sub>一</sub>。既此<sub>二</sub>二六瑞<sub>一</sub>、古今一種。始終具足、不增不減。文殊答云<sub>三</sub>「今相如<sub>二</sub>本瑞<sub>一</sub>」。何非<sub>二</sub>瑞相<sub>一</sub>耶。故論云<sub>下</sub>「示<sub>二</sub>現種種諸相<sub>一</sub>者、以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>現彼事<sub>一</sub>故<sub>上</sub>」。乃至云<sub>下</sub>「以<sub>三</sub>文殊師利能記<sub>二</sub>彼事<sub>一</sub>故<sub>上</sub>」。

問。喜怒人之常情。何得<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>瑞。

答。天花悅<sub>レ</sub>眼、地動震<sub>レ</sub>心。大經云<sub>三</sub>「動時能令<sub>二</sub>衆生心動<sub>一</sub>」。花・地是外瑞、心喜是内瑞。非常之喜、昔雖<sub>二</sub>曾有<sub>一</sub>、而不<sub>二</sub>為<sub>レ</sub>喜所<sub>レ</sub>動。而今能一心觀<sub>レ</sub>仏。何得<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>瑞。

### 【訓読】

經の「爾時仏放」従り、「起七宝塔」に至るまでは、論に名づけて第五に依止説因成就と為す。疏には分けて七瑞と為す。經の「爾時仏放」より、「阿迦尼咤天」に至るまでは、名づけて第六に如来放光瑞と為す。已上の六瑞は、此土に現ずる所の故に、名づけて此土の六瑞と為す。

問う。何の故に論は此の句を成就に入れざるや。

答う。此の放光瑞は、自土・他土に通ず。論は他土の義辺に依りて、後の成就に入る。疏は自土の義辺に依りて、六瑞の内に入る。

問う。何を以て放光瑞の自他土に通ずることを知ることを得んや。

答う。弥勒の發問偈に「眉間の白毫、大光普く照る<sup>(20)</sup>」と云う。此の二句は此土の放光を明かす。又「眉間の光明、東方を照らす<sup>(21)</sup>」等は、他土に放つ所を明かす<sup>(22)</sup>。故に知ぬ、放光瑞は自他土に通ずることを。

問う。此の放光瑞は、已に此土の瑞に入る。他土の六瑞とは何ん。

答う。經の「於此世界」従り、「六趣衆生」に至るまでは、第一に名づけて他土見下瑞と為す<sup>(23)</sup>。經の「又見彼土現在諸仏」は、第二に名づけて他土見上瑞と為す<sup>(24)</sup>。經の「及聞諸仏所說經法」は、第三に名づけて他土聞法瑞と為す<sup>(25)</sup>。經の「并見彼諸」従り、「得道者」に至るまでは、第四に名づけて他土見人瑞と為す<sup>(26)</sup>。

經の「復見諸菩薩」従り、「行菩薩道」に至るまでは、第五に名づけて他土見始瑞と為す<sup>(27)</sup>。經の「復見諸仏」従り、「起七宝塔」に至るまでは、第六に名づけて他土見終瑞と為す<sup>(28)</sup>。

問う。瑞相とは本奇異<sup>(29)</sup>を論ず。說經・入定は、仏の恒の儀なり。又他方見物は、奇と為すに足らず。何ぞ說經・入定、並びに見他方等を、瑞相と為さんや。

答う。說法竟ると雖も、時の衆散せずして、肅<sup>(30)</sup>みて待つ所有り。故に知ぬ、前の説に衆を挙げて來集し、後聞を待つことを。此の事奇特にして、常の説と異なる。何の意ぞ瑞に非ざらん。開定に入ると雖も、意は合定に在り。常の入定と異なり有り。何の意ぞ瑞相に非ざらんや。又文殊は古仏の六瑞の、皆此の事を為すことを引く。若し昔瑞相あるに非ざらんば、何を以てか今を証せん。今古同じく然なり<sup>(29)</sup>。經を説くが故に定に入ることを得。定に入るが故に花を雨ふらし地を動ぜしむることを得。花を雨ふらし地を動ぜしむ



るが故に大衆心の喜ぶことを得。大衆心の喜ぶが故に如来の放光を得。如来の放光の故に他土の異相を見ることを得。既に此の二の六瑞は、古今に一種なり。始終に具足して、不増不減なり。文殊の答に「今の相は本瑞の如し」<sup>(30)</sup>と云う。何ぞ瑞相に非ざらんや。故に論に「種類の諸相を示現すとは、彼の事を示現せんが為を以ての故なり」と云う。乃至「文殊師利能く彼の事を記するを以ての故なり」<sup>(31)</sup>と云う。問う。喜怒は人の常情なり。何ぞ瑞と為ることを得ん。

答う。天花は眼を悦ばしめ、地動は心を震わしむ。大経に「動ずる時は能く衆生の心をして動ぜしむ」と云う。花・地は是れ外瑞、心喜は是れ内瑞なり。非常の喜にして、昔に曾て有りと雖も、而れども喜の為に動ぜられず。而して今能く一心に観仏ず。何ぞ瑞に非ざることを得ん。<sup>(32)</sup>

【註釈】

- (17) 論に名づけて第五に依止説因成就と為す 『法華論』卷上(大正二六・三頁中)。「法華文句記」卷一上(大正三四・一五三頁中)には、「五從<sub>二</sub>放光<sub>一</sub>去、名<sub>二</sub>依止説因成就<sub>一</sub>。由<sub>二</sub>放光<sub>一</sub>故、見<sub>二</sub>他土説<sub>一</sub>。」とあり、『法華經』に成就が配されている。
- (18) 疏には分けて七瑞と為す 七瑞とは、此土の六瑞の第六放光瑞と他土の六瑞を指す。
- (19) 第六に如来放光瑞と為す 『法華文句』卷二下(大正三四・二九頁上中下)。
- (20) 「眉間の白毫、大光普く照る」 『法華經』卷二・序品第一(大正九・二頁下)。

(21) 「眉間の光明、東方を照らす」 『法華經』卷二・序品第一（大正九・二頁下）。『法華文句』卷二下（大正三四・二九頁中）に「今尋<sup>レ</sup>文、從<sup>二</sup>「照東方万人千土」<sup>一</sup>下、即是他土六瑞之文。」とあり、また『同』（三〇頁下）にも「知<sup>下</sup>上文「光照東方」、是總照<sup>二</sup>他土<sup>一</sup>意<sup>上</sup>也。」とある。

(22) 他土に放つ所を明かす 『法華文句』卷二下（大正三四・二八頁下～二九頁中）。

(23) 第一に名づけて他土見下瑞と為す 『法華文句』卷二下（大正三四・二九頁下）に「次明<sup>レ</sup>光<sup>二</sup>照他土六瑞<sup>一</sup>者、一見六趣、二見諸仏。即是上聖・下凡為<sup>二</sup>一双<sup>一</sup>。三聞仏說法、四見四衆得道。即是人・法一双。五見菩薩行行、六見仏涅槃。即是始・終一双。」とあるなかの第一の見六趣に当たる。

(24) 第二に名づけて他土見上瑞と為す 『法華文句』所説の他土の六瑞の第二の見諸仏に当たる。註(23)参照。

(25) 第三に名づけて他土聞法瑞と為す 『法華文句』所説の他土の六瑞の第三の聞仏說法に当たる。註(23)参照。

(26) 第四に名づけて他土見人瑞と為す 『法華文句』所説の他土の六瑞の第四の見四衆得道に当たる。註(23)参照。

(27) 第五に名づけて他土見始瑞と為す 『法華文句』所説の他土の六瑞の第五の見菩薩行行に当たる。註(23)参照。

(28) 第六に名づけて他土見終瑞と為す 『法華文句』所説の他土の六瑞の第六の見仏涅槃に当たる。註

(23) 参照。

(29) 問う。瑞相とは本奇異を論ず。古今同じく然なり 『法華文句』卷二下(大正三四・二八頁中)

の「問。瑞相本論<sub>二</sub>奇異<sub>一</sub>。說法・入定、仏之恒儀。何得<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>瑞。答。說法雖<sub>レ</sub>竟、時衆不<sub>レ</sub>散。肅有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>待。故知、前之說法、舉<sub>レ</sub>衆來集、待<sub>二</sub>於後聞<sub>一</sub>。此事奇特、与<sub>二</sub>常說<sub>一</sub>異。何意非<sub>レ</sub>瑞。雖<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>開定<sub>一</sub>、意在<sub>二</sub>合定<sub>一</sub>。与<sub>二</sub>常入定<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>異。何意非<sub>二</sub>瑞相<sub>一</sub>耶。又文殊引<sub>三</sub>古仏六瑞<sub>一</sub>、皆有<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>。若昔非<sub>二</sub>瑞相<sub>一</sub>、何以証<sub>レ</sub>今。今古同然。」に基づく。

(30) 「今の相は本瑞の如し」 『法華經』卷二・序品第一(大正九・五頁中)。

(31) 論に「種種の諸相を示現すとは、<sub>レ</sub>文殊師利能く彼の事を記するを以ての故なり」と云う 『法華論』卷上(大正二六・三頁下)に「示<sub>二</sub>現種種諸瑞相<sub>一</sub>者、以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>現彼彼事<sub>一</sub>故。如<sub>二</sub>彼事相現没住滅<sub>一</sub>、応<sub>二</sub>当善知<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>文殊師利<sub>一</sub>、能記<sub>二</sub>彼事<sub>一</sub>故。」とある。

(32) 問う。喜怒は人の常情なり。<sub>レ</sub>何ぞ瑞に非ざることを得ん 『法華文句』卷二下(大正三四・二九頁上)。また、「大経にくと云う」は、『涅槃經』卷二(大正一一・六一五頁上)に見える。

### 【通釈】

『法華經』の「爾時仏放」から「起七宝塔」までの経文は、『法華論』の七成就の第五の依止説因成就に当たる。『法華文句』では、この箇所を此土の六瑞の第六の放光瑞と他土の六瑞(他土見下瑞・他土見

上瑞・他土聞法瑞・他土見人瑞・他土見始瑞・他土見終瑞）を合わせた、七瑞に当てる。

### 【解説】

『法華文句』に説かれる此土の六瑞に関する問答を引用している。ここで最澄は、他土の六瑞にも適用されるように文を付加して、瑞相を説明している。

### § 1-6 第六大衆欲聞法現前成就

#### 【本文】

經從<sup>二</sup>「爾時弥勒菩薩、作是念<sup>レ</sup>」、至<sup>二</sup>「為説何等<sup>レ</sup>」、論名為<sup>二</sup>大衆欲聞法現前成就。疏分為<sup>二</sup>兩序<sup>一</sup>。經從<sup>二</sup>「爾時弥勒菩薩、作是念<sup>レ</sup>」、至<sup>二</sup>「今當問誰<sup>レ</sup>」、名為<sup>二</sup>別序第三疑念序<sup>一</sup>。亦分為<sup>レ</sup>二。經從<sup>二</sup>「爾時弥勒菩薩、作是念<sup>レ</sup>」、至<sup>二</sup>「我今當問<sup>レ</sup>」、名為<sup>二</sup>弥勒疑念。經從<sup>二</sup>「爾時弥勒菩薩、欲自決疑<sup>レ</sup>」、至<sup>二</sup>「為説何等<sup>レ</sup>」、名為<sup>二</sup>別序之第四發問序<sup>一</sup>。疏分為<sup>レ</sup>二。初長行、次偈頌。初長行分<sup>レ</sup>三。

#### 【訓読】

經の「爾時弥勒菩薩、作是念」従り、「為説何等」に至るまでは、論に名づけて大衆欲聞法現前成就と

為す。<sup>(33)</sup> 疏には分けて両序と為す。<sup>(34)</sup> 經の「爾時弥勒菩薩、作是念」従り、「今当問誰」に至るまでは、名づけて別序の第三の疑念序と為す。亦た分けて二と為す。<sup>(35)</sup> 經の「爾時弥勒菩薩、作是念」従り、「我今当問」に至るまでは、名づけて弥勒疑念と為す。<sup>(36)</sup> 經の「爾時比丘」従り、「今当問誰」に至るまでは、名づけて大衆疑念と為す。<sup>(37)</sup> 經の「爾時弥勒菩薩、欲自決疑」従り、「為説何等」に至るまでは、名づけて別序の第四の発問序と為す。疏には分けて二と為す。初に長行、次に偈頌なり。初の長行は三に分かつ。<sup>(38)</sup>

【註釈】

(33) 論に名づけて大衆欲聞法現前成就と為す 『法華論』卷上(大正二六・三頁中下)。『法華文句記』

卷一上(大正三四・一五三頁中)には、「六從」<sup>二</sup>「弥勒疑念」<sup>一</sup>去、名<sup>二</sup>大衆欲聞法現前成就<sup>一</sup>とあり、『法華經』に成就が配されている。

(34) 疏には分けて両序と為す 別序の第三の疑念序と第四の発問序を指す。

(35) 別序の第三の疑念序と為す。亦た分けて二と為す 『法華文句』卷二下(大正三四・三〇頁上)に

「爾時弥勒、作是念」、訖<sup>二</sup>「今当問誰」<sup>一</sup>、是疑念序。文為<sup>レ</sup>兩。一弥勒疑念、二大衆疑念。」とある。また、弥勒疑念と大衆疑念に関する經文の範圍の規定は、法雲撰『法華經義記』卷一(大正三三・五八三頁中)に「自<sup>レ</sup>此下、是第三詔為<sup>二</sup>疑念序<sup>一</sup>。亦有<sup>二</sup>兩段<sup>一</sup>。第一先明<sup>三</sup>弥勒有<sup>二</sup>疑念<sup>一</sup>。第二從<sup>二</sup>爾時比丘<sup>一</sup>」以下、竟<sup>二</sup>「今当問誰」<sup>一</sup>、即叙<sup>二</sup>大衆有疑念<sup>一</sup>也。」とある。

(36) 弥勒疑念と為す 註(35)参照。

(37) 大衆疑念と為す 註(35)参照。

(38) 別序の第四の発問序と為す。初の長行は三に分かつ 『法華文句』卷三上(大正三四・三〇頁中)に「從<sup>二</sup>爾時弥勒、欲自決疑<sup>一</sup>」下、訖偈、即是發問序。文為<sup>レ</sup>二。長行、偈頌。長行中、經家述<sup>二</sup>自疑・他疑・發問<sup>一</sup>」とある。

### 【通釈】

『法華經』の「爾時弥勒菩薩、作是念」から「為說何等」までの經文は、『法華論』の七成就の第六の大衆欲聞法現前成就に当たる。『法華文句』では、この箇所を別序の第三の疑念序と第四の發問序とする。

### § 1-7 第七文殊師利答成就

#### 【本文】

經從<sup>二</sup>爾時文殊師利、語弥勒<sup>一</sup>、至<sup>二</sup>「令尽無有余<sup>一</sup>」、論名為<sup>二</sup>文殊師利答成就<sup>一</sup>。

#### 【訓読】

經の「爾時文殊師利、語弥勒」従り、「令尽無有余」に至るまでは、論に名づけて文殊師利答成就と為す。<sup>(39)</sup>

【註釈】

(39) 論に名づけて文殊師利答成就と為す 『法華論』卷上(大正二六・三頁下〜四頁中)。

【通釈】

『法華經』の「爾時文殊師利、語弥勒」から「令尽無有余」までの經文は、『法華論』の七成就の第七の文殊師利答成就に当たる。

§ 1-7-1 第一現見大義因成就

【本文】

論亦分為<sup>レ</sup>十。經從<sup>二</sup>「爾時文殊師利、語弥勒」<sup>一</sup>、至<sup>二</sup>「演大法義」<sup>一</sup>、論名為<sup>二</sup>第一現見大義因成就<sup>一</sup>。文有<sup>二</sup>八句<sup>一</sup>。開<sup>二</sup>經五句<sup>一</sup>、為<sup>二</sup>八釈<sup>一</sup>耳。其開所以、当所具顯。疏自下名為<sup>二</sup>第五別序之文殊答問序<sup>一</sup>。亦分為<sup>レ</sup>四。經從<sup>二</sup>「爾時文殊師利、語弥勒」<sup>一</sup>、至<sup>二</sup>「演大法義」<sup>一</sup>、名為<sup>二</sup>惟付答<sup>一</sup>。

【訓読】

論に亦た分けて十と為す<sup>(40)</sup>。經の「爾時文殊師利、語弥勒」従り、「演大法義」に至るまでは、論に名づけて第一に現見大義因成就と為す<sup>(41)</sup>。文に八句有り。經の五句を開して、八釈と為すのみ。其の開する所以は、当所に具に顕る。疏には自下を名づけて第五の別序の文殊答問序と為す<sup>(42)</sup>。亦た分けて四と為す。經の「爾時文殊師利、語弥勒」従り、「演大法義」に至るまでは、名づけて惟付答と為す<sup>(43)</sup>。

### 【註釈】

(40) 論に亦た分けて十と為す 『法華論』卷上(大正二六・三頁下、四頁上)に「何等名為成就十事」

一者現見大義因成就、二者現見世間文字章句意甚深因成就、三者現見希有因成就、四者現見勝妙因成就、五者現見受用大因成就、六者現見撰取一切諸仏轉法輪因成就、七者現見善堅実如来法輪因成就、八者現見能進入因成就、九者現見憶念因成就、十者現見自身所經事因成就。」とある。

(41) 論に名づけて第一に現見大義因成就と為す 『法華論』卷上(大正二六・四頁上)。なお、基撰

『法華玄贊』卷二末(大正三四・六八八頁中)には、「經「善男子等、如我惟付」、至「演大法義」、贊曰、正答所徵也。然依論本、此答之中、成就十事。第一現見大義因、即此文是。」とあり、『法華經』に十因成就が配されている。

(42) 疏には自下を名づけて第五の別序の文殊答問序と為す 『法華文句』卷三上(大正三四・三二頁

下)に「從「是時文殊師利、語弥勒」下、訖偈、名答問序。有長行偈頌。長行文為四。一從



「語弥勒」<sup>一</sup>下、名<sup>二</sup>惟付答。二從<sup>三</sup>「善男子、我於過去」<sup>一</sup>下、名<sup>二</sup>略曾見答。三從<sup>三</sup>「諸善男子、如過去」<sup>一</sup>下、名<sup>二</sup>広曾見答。四從<sup>三</sup>「今見此瑞、与本無異」<sup>一</sup>下、名<sup>二</sup>分明判答。」とある。

(43) 惟付答と為す 別序の第五の文殊答問序の第一の惟付答のこと。註(42)参照。

### 【通釈】

『法華経』の「爾時文殊師利、語弥勒」から「令尽無有余」までの经文は、『法華論』の文殊師利答成就に説かれる十因成就の第一の現見大義因成就に当たる。『法華論』では、現見大義因成就は八句によって説示されている一方で、『法華経』の該当箇所には五句しかない。これについては、『法華経』の五句を『法華論』では八句に開いたと考えるのが適當である。また『法華文句』では、この箇所を別序の第五の文殊答問序の第一の惟付答とする。

### 【解説】

「文に八句有り。経の五句を開して、八釈と為すのみ。」という記述について、『法華論』で現見大義因成就は、「①欲論大法②欲雨大法③欲擊大法鼓④欲建大法幢⑤欲然大法灯⑥欲吹大法蠡⑦欲不斷大法鼓⑧欲説大法」の八句によって説示される。他方、『法華経』の該当箇所には「①欲説大法②雨大法雨③吹大法螺④擊大法鼓⑤演大法義」の五句が示されるだけである。『法華玄贊』卷二末(大正三四・六八八

頁中（六八九頁上）は、この不一致を以下のように解釈する。

八大義者、經有<sub>二</sub>五句<sub>一</sub>。論有<sub>二</sub>八句<sub>一</sub>。応<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>欲說大法・雨大法雨・擊大法鼓・不斷大法鼓・建大法幢・燃大法炬・吹大法螺・演大法義<sub>一</sub>。……此八句中、分為<sub>二</sub>四對<sub>一</sub>。一破惡進善對、二開權顯實對、三得智証真對、四說法利生對。如<sub>レ</sub>是循環、名為<sub>二</sub>法輪<sub>一</sub>。自既得<sub>レ</sub>果、欲<sub>レ</sub>令<sub>下</sub>有情、証<sub>二</sub>聖真智<sub>一</sub>、破<sub>中</sub>滅煩惱<sub>上</sub>。論既鉤鎖解<sub>レ</sub>經。故此相乘為<sub>レ</sub>對。可<sub>三</sub>披解<sub>レ</sub>意、尋<sub>二</sub>積<sub>一</sub>來由。經有<sub>二</sub>五句<sub>一</sub>、唯<sub>二</sub>對半<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>破惡進善・說法利生・開權一門<sub>一</sub>。自余顯實・得智証真文對、皆闕。仍不<sub>二</sub>次第<sub>一</sub>。讀者<sub>レ</sub>知。

すなわち、『法華論』の八句には、破惡進善對・開權顯實對・得智証真對・說法利生對の四對の義が備わっているが、『法華經』の五句には、破惡進善對・說法利生對・開權對があるのみで、顯實對・得智証真對を欠くという。これに対して、『法華文句記』卷三中（大正三四・二〇三頁中）には、次のようにある。

然論有<sub>二</sub>八句<sub>一</sub>。一欲說大法、二欲雨大法雨、三欲擊大法鼓、四欲建大法幢、五欲然大法炬、六欲吹大法蠡、七欲不斷大法鼓、八欲演大法義。今但依<sub>二</sub>五句<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>初句<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>總、下四為<sub>レ</sub>別。他、以<sub>二</sub>八句<sub>一</sub>、四對<sub>レ</sub>之。而云、一破惡進善對、二開權顯實對、三得智証真對、四說法利生對。仍云、尋<sub>二</sub>積<sub>一</sub>來由、唯有<sub>二</sub>五句<sub>一</sub>、成<sub>二</sub>兩對半<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>破惡進善・說法利生・開權一句<sub>一</sub>。余者則闕。仍不<sub>二</sub>次第<sub>一</sub>。讀者<sub>レ</sub>知。今謂、論文八句、積<sub>二</sub>經五句<sub>一</sub>。是知、不斷・幢・炬、積<sub>二</sub>法鼓<sub>一</sub>耳。不斷明<sub>二</sub>鼓體相統<sub>一</sub>。幢是法鼓標幟。炬明<sub>二</sub>法鼓破<sub>レ</sub>暗。以<sub>レ</sub>喻<sub>レ</sub>積<sub>レ</sub>喻、道理如然。

湛然は、「他」の説として『法華玄贊』の所説に言及した上で、『法華論』のみに説かれる「不断（大法鼓）・（建大法）幢・（燃大法）炬」は、「撃大法鼓」の句を開いて釈したものであることを論じ、『法華經』の五句と『法華論』の八句を消釈する。『法華論科文』は、この教説を踏襲している。また最澄は、『守護国界章』巻中之下（伝全二・四四九頁く四五三頁）においても、この湛然の教説を継承して、徳一に応答している。

### § 1-7-2 第二現見世間文字章句意甚深因成就

#### 【本文】

經從<sup>二</sup>「諸善男子、我於過去<sup>一</sup>」、至<sup>二</sup>「故現此瑞<sup>一</sup>」、論名為<sup>二</sup>第二現見世間文字章句意甚深因成就<sup>一</sup>。疏名為<sup>二</sup>第五別序之第二略曾見答<sup>一</sup>。

#### 【訓読】

經の「諸善男子、我於過去<sup>(4)</sup>」從り、「故現此瑞」に至るまでは、論に名づけて第二に現見世間文字章句意甚深因成就と為す。<sup>(4)</sup> 疏には名づけて第五の別序の第二の略曾見答と為す。<sup>(4)</sup>

#### 【註釈】

(44) 論に名づけて第二に現見世間文字章句意甚深因成就と為す 『法華論』卷上(大正二六・四頁上)。

なお、基撰『法華玄贊』卷二末(大正三四・六八八頁中)には、「第二「諸善男子、我於過去」下、現見世間文字章句甚深意因。」とあり、『法華經』に十因成就が配されている。

(45) 疏には名づけて第五の別序の第二の略曾見答と為す 別序の第五の文殊答問序の第二の略曾見答のこと。註(42)参照。

### 【通釈】

『法華經』の「諸善男子、我於過去」から「故現此瑞」までの經文は、『法華論』の文殊師利答成就に説かれる十因成就の第二の現見世間文字章句意甚深因成就に当たる。『法華文句』では、この箇所を別序の第五の文殊答問序の第二の略曾見答とする。

### § 173 第三現見希有因成就

#### 【本文】

經從<sup>二</sup>「諸善男子、如過去無量無辺<sup>一</sup>」、至<sup>二</sup>「成一切種智<sup>一</sup>」、論名為<sup>二</sup>第三現見希有因成就<sup>一</sup>。疏自下、至<sup>二</sup>「我身是也<sup>一</sup>」、名為<sup>二</sup>第五別序之第三広曾見答<sup>一</sup>。亦分為<sup>レ</sup>三。初最初一仏同、二中間二万仏同、三最後一仏同。今此第三成就、疏名為<sup>二</sup>広曾之中、最初一仏同三分<sup>一</sup>。

【訓読】

經の「諸善男子、如過去無量無辺」従り、「成一切種智」に至るまでは、論に名づけて第三に現見希有因成就と為す。<sup>(46)</sup> 疏には自下の、「我身是也」に至るまでを、名づけて第五の別序の第三の広曾見答と為す。亦た分けて三と為す。初には最初一仏同、二には中間二万仏同、三には最後一仏同なり。<sup>(47)</sup> 今此の第三の成就を、疏には名づけて広曾の中の、最初一仏同の三分と為す。<sup>(48)</sup>

【註釈】

(46) 論に名づけて第三に現見希有因成就と為す 『法華論』卷上(大正二六・四頁上)。なお、基撰

『法華玄贊』卷二末(大正三四・六八八頁中)には、「第三「諸善男子、如過去無量無辺」下、現見希有因。」とあり、『法華經』に十因成就が配されている。

(47) 疏には自下の、〃三には最後一仏同なり 別序の第五の文殊答問序の第三の広曾見答のこと。『法

華文句』卷三上(大正三四・三三頁中下)に「如過去」下、三引「広曾見答。更分「明於略」。此広答「此土・他土之間。弥勒因「光、横見「東方、以為「問。文殊引「昔豎見、而為「答。横豎頭「諸仏道同」也。文為「三。初引「一仏同、次引「二万仏同、後引「最後一仏同。就「前一仏、又為「三。一明「時節、二標名、三説法。」とある。

(48) 今此の第三の成就を、疏には名づけて広曾の中の、最初一仏同の三分と為す。最初一仏同の三分とは、時節・標名・説法を指す。註(47)参照。

### 【通釈】

『法華経』の「諸善男子、如過去無量無辺」から「成一切種智」までの経文は、『法華論』の文殊師利答成就に説かれる十因成就の第三の現見希有因成就に当たる。『法華文句』では、この箇所を別序の第五の文殊答問序の第三の広曾見答のうち、最初一仏同とする。

### § 1-7-4 第四現見勝妙因成就

#### 【本文】

経従<sup>一</sup>「次復有仏、亦名日月灯明」<sup>一</sup>、至<sup>二</sup>「所可説法、初中後善」<sup>一</sup>、論名為<sup>二</sup>第四現見勝妙因成就<sup>一</sup>。疏名為<sup>二</sup>広曾之中、二万仏同<sup>一</sup>。

#### 【訓読】

経の「次復有仏、亦名日月灯明」従り、「所可説法、初中後善」に至るまでは、論に名づけて第四に現見勝妙因成就と為す。<sup>(49)</sup> 疏には名づけて広曾の中の、二万仏同と為す。<sup>(50)</sup>

【註釈】

(49) 論に名づけて第四に現見勝妙因成就と為す 『法華論』卷上(大正二六・四頁上)。なお、基撰

『法華玄贊』卷二末(大正三四・六八八頁中)には、「第四「次復有仏、亦名日月灯明」下、現見勝妙因。」とあり、『法華經』に十因成就が配されている。

(50) 疏には名づけて広曾の中の、二万仏同と為す 註(47)参照。

【通釈】

『法華經』の「次復有仏、亦名日月灯明」から「所可說法、初中後善」までの經文は、『法華論』の文殊師利答成就に説かれる十因成就の第四の現見勝妙因成就に当たる。『法華文句』では、この箇所を別序の第五の文殊答問序の第三の広曾見答のうち、中間二万仏同とする。

§ 1-7-5 第五現受用大因成就

【本文】

經從<sup>一</sup>「其最後<sup>二</sup>」、至<sup>三</sup>「便於中夜、入無余涅槃<sup>四</sup>」、論名為<sup>五</sup>第五現受用大因成就。疏名為<sup>六</sup>広曾之中、最後一仏同。亦分為<sup>七</sup>三。經從<sup>八</sup>「其最後<sup>九</sup>」、至<sup>一〇</sup>「殖諸善本<sup>一一</sup>」、名為<sup>一二</sup>曾見事与今已同。經從<sup>一三</sup>「是時日月

灯<sub>レ</sub>、至<sub>二</sub>「所為因緣」<sub>一</sub>、疏名為<sub>二</sub>曾見事与今今同<sub>一</sub>。亦分為<sub>二</sub>。經從<sub>二</sub>「是時日月」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「靡不周遍」<sub>一</sub>、名為<sub>二</sub>曾此土六瑞<sub>一</sub>。經從<sub>二</sub>「如今所見、是諸仏土」<sub>一</sub>、名為<sub>二</sub>曾他土六瑞<sub>一</sub>。初此土六瑞、具判<sub>二</sub>六瑞<sub>一</sub>。經從<sub>二</sub>「是時日月」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「仏所護念」<sub>一</sub>、第一<sub>レ</sub>舉<sub>二</sub>曾說<sub>レ</sub>經瑞<sub>一</sub>、答<sub>二</sub>今說<sub>レ</sub>經瑞同<sub>一</sub>。經從<sub>二</sub>「說是経已」<sub>一</sub>、乃至<sub>二</sub>「身心不動」<sub>一</sub>、第二<sub>レ</sub>舉<sub>二</sub>曾入定瑞<sub>一</sub>、答<sub>二</sub>今入定瑞同<sub>一</sub>。經從<sub>二</sub>「是時天雨」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「及諸大衆」<sub>一</sub>、第三<sub>レ</sub>舉<sub>二</sub>曾雨華瑞<sub>一</sub>、答<sub>二</sub>今雨華瑞同<sub>一</sub>。經<sub>二</sub>「普仏世界、六種震動」<sub>一</sub>、第四<sub>レ</sub>舉<sub>二</sub>昔地動瑞<sub>一</sub>、答<sub>二</sub>今地動瑞同<sub>一</sub>。經<sub>二</sub>「爾時會中」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「一心觀仏」<sub>一</sub>、第五<sub>レ</sub>舉<sub>二</sub>曾大衆心喜瑞<sub>一</sub>、答<sub>二</sub>今大衆心喜瑞同<sub>一</sub>。經<sub>二</sub>「爾時如来」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「靡不周遍」<sub>一</sub>、第六<sub>レ</sub>舉<sub>二</sub>如来放光瑞同<sub>一</sub>。他土文如上<sub>レ</sub>。經從<sub>二</sub>「弥勒当知」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「所為因縁」<sub>一</sub>、舉<sub>二</sub>曾別序之中第三<sub>レ</sub>疑念序<sub>一</sub>、答<sub>二</sub>今疑念序同<sub>一</sub>。經從<sub>二</sub>「時有菩薩」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「八百弟子」<sub>一</sub>、自下第三<sub>レ</sub>名為<sub>二</sub>曾見事与今今同<sub>一</sub>。亦分為<sub>二</sub>六<sub>一</sub>。此句即是第一<sub>レ</sub>名為<sub>二</sub>因人同<sub>一</sub>。經從<sub>二</sub>「是時日月」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「仏所護念」<sub>一</sub>、第二<sub>レ</sub>名為<sub>二</sub>説法同<sub>一</sub>。經從<sub>二</sub>「六十小劫」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「而生懈倦」<sub>一</sub>、第三<sub>レ</sub>名為<sub>二</sub>時節同<sub>一</sub>。經從<sub>二</sub>「日月灯明」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「入無余涅槃」<sub>一</sub>、第四<sub>レ</sub>名為<sub>二</sub>唱滅同<sub>一</sub>。經從<sub>二</sub>「時有菩薩」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「仏陀」<sub>一</sub>、第五<sub>レ</sub>名為<sub>二</sub>授記同<sub>一</sub>。經從<sub>二</sub>「仏授記已」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「汝身是也」<sub>一</sub>、第六<sub>レ</sub>名為<sub>二</sub>通経同<sub>一</sub>。論分為<sub>二</sub>四成就<sub>一</sub>。經<sub>二</sub>「仏授記已」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「入無余涅槃」<sub>一</sub>、論入<sub>二</sub>大因成就句<sub>一</sub>。

### 【校訂】

底本の「第一<sub>レ</sub>舉<sub>二</sub>曾說<sub>レ</sub>経論<sub>一</sub>」を、伝全の頭註に従つて「第一<sub>レ</sub>舉<sub>二</sub>曾說<sub>レ</sub>経瑞<sub>一</sub>」に改める。

底本の「答<sub>二</sub>今說<sub>レ</sub>経論瑞同<sub>一</sub>」を、伝全の頭註に従つて「答<sub>二</sub>今說<sub>レ</sub>経瑞同<sub>一</sub>」に改める。



底本の「曾、挙別序之中」を、伝全の頭註に従って「曾、曾別序之中」に改める。  
 底本の「論、大、因成就句」を、「論、大、因成就句」に改める。

【訓読】

經の「其最後仏」従り、「便於中夜、入無余涅槃」に至るまでは、論に名づけて第五に現受用大因成就と爲す<sup>(51)</sup>。疏には名づけて広曾の中の、最後一仏同と爲す。亦た分けて三と爲す<sup>(52)</sup>。經の「其最後」従り、「殖諸善本」に至るまでは、名づけて曾見事与今已同と爲す<sup>(53)</sup>。經の「是時日月灯」従り、「所為因縁」に至るまでは、疏には名づけて曾見事与今今同と爲す<sup>(54)</sup>。亦た分けて二と爲す。經の「是時日月」従り、「靡不周遍」に至るまでは、名づけて曾ての此土の六瑞と爲す<sup>(55)</sup>。經の「如今所見、是諸仏土」従り、名づけて曾ての他土の六瑞と爲す<sup>(56)</sup>。初は此土の六瑞は、具に六瑞を判ず。經の「是時日月」従り、「仏所護念」に至るまでは、第一に曾て經に説く瑞を挙げて、今經に説く瑞に同じきを答う。經の「説是經已」従り、乃至「身心不動」までは、第二に曾ての入定瑞を挙げて、今の入定瑞に同じきを答う。經の「是時天雨」従り、「及諸大衆」に至るまでは、第三に曾ての雨華瑞を挙げて、今の雨華瑞に同じきを答う。經の「普仏世界、六種震動」は、第四に昔の地動瑞を挙げて、今の地動瑞に同じきを答う。經の「爾時會中」より、「一心觀仏」に至るまでは、第五に曾ての大衆心喜瑞を挙げて、今の大衆心喜瑞に同じきを答う。經の「爾時如來」より、「靡不周遍」に至るまでは、第六に如來放光瑞に同じきを挙ぐ。他土の文は上の如し。經の

「弥勒当知」従り、「所為因縁」に至るまでは、曾ての別序の中の第三の疑念序を挙げて、今の疑念序に同じきを答う。<sup>(57)</sup> 經の「時有害薩」従り、「八百弟子」に至るまでは、自下に第三に名づけて曾見事与今当同と為す。亦た分けて六と為す。此の句は即ち是れ第一に名づけて因人同と為す。經の「是時日月」従り、「仏所護念」に至るまでは、第二に名づけて説法同と為す。經の「六十小劫」従り、「而生懈倦」に至るまでは、第三に名づけて時節同と為す。經の「日月灯明」従り、「入無余涅槃」に至るまでは、第四に名づけて唱滅同と為す。經の「時有害薩」従り、「仏陀」に至るまでは、第五に名づけて授記同と為す。經の「仏授記已」従り、「汝身是也」に至るまでは、第六に名づけて通経同と為す。<sup>(58)</sup> 論に分けて四成就と為す。<sup>(59)</sup> 經の「仏授記已」より、「入無余涅槃」に至るまでは、論には大因成就の句に入る。<sup>(60)</sup>

### 【註釈】

(51) 論に名づけて第五に現受用大因成就と為す 『法華論』卷上(大正二六・四頁上中)。なお、基撰『法華玄贊』卷二末(大正三四・六八八頁中)には、「第五「其最後仏、未出家」下、現見受用大因。」とあり、『法華経』に十因成就が配されている。

(52) 疏には名づけて広曾の中の、最後一仏同と為す。亦た分けて三と為す 『法華文句』卷三上(大正三四・三四頁上)に「其最後」下、第三引<sup>二</sup>一仏同。文為<sup>レ</sup>三。一明<sup>二</sup>曾見事与今已同、二明<sup>二</sup>曾見事与今同、三明<sup>二</sup>曾見事与今当同。」とある。

(53) 曾見事与今已同と為す 『法華文句』卷三上(大正三四・三四頁上)に「第一從<sub>二</sub>「其最後仏、有八子<sub>一</sub>」者、是曾与已同。」とある。

(54) 疏には名づけて曾見事与今今同と為す 『法華文句』卷三上(大正三四・三四頁中)に「從<sub>二</sub>「是時日月灯仏、説大乘經<sub>一</sub>」下、第二明曾与今同。昔仏自土六瑞、悉与<sub>レ</sub>今同。次第如<sub>レ</sub>文。昔仏他土六瑞、総云<sub>二</sub>「如今所見<sub>一</sub>」、則知<sub>二</sub>昔仏他土六瑞、亦与<sub>レ</sub>今同。昔明<sub>二</sub>別序<sub>一</sub>。既有<sub>二</sub>現相・懷疑二序同<sub>一</sub>。」とある。

(55) 曾ての此土の六瑞と為す 註(54)参照。

(56) 曾ての他土の六瑞と為す 註(54)参照。

(57) 曾ての別序の中の第三の疑念序を挙げて、今の疑念序に同じきを答う 註(54)参照。

(58) 第三に名づけて曾見事与今当同と為す第六に名づけて通経同と為す 『法華文句』卷三上(大正

三四・三四頁中)に「從<sub>二</sub>「時有菩薩、名曰妙光<sub>一</sub>」下、第三明曾与当同。此文為<sub>レ</sub>六。一從<sub>二</sub>「時有菩薩<sub>一</sub>」者、是因人同。二從<sub>二</sub>「爾時日月灯明仏、從<sub>三</sub>昧起<sub>一</sub>」者、是說法名同。三從<sub>二</sub>「六十小劫<sub>一</sub>」者、是時節同。四從<sub>二</sub>「説是經已、於梵魔沙門<sub>一</sub>」者、是唱滅同。五從<sub>二</sub>「時有菩薩、名曰徳藏<sub>一</sub>」者、是授記同。六從<sub>二</sub>「便於中夜<sub>一</sub>」者、明<sub>二</sub>滅後通経同<sub>一</sub>。」とある。なお、第四の唱滅同の規定について、『同』(三四頁下)には、「從<sub>二</sub>「日月灯明<sub>一</sub>」下、第四唱滅同者、昔説<sub>二</sub>法華、即唱<sub>二</sub>入滅<sub>一</sub>。」とある。

(59) 論に分けて四成就と為す 不明。『法華經』の「仏授記已」から「汝身是也」までの經文は、本来ならば、十因成就のうち、第五現見受用大因成就の一部、第六現見撰取一切諸仏転法輪因成就、第七現見善堅実如来法輪因成就、第八現見能進入因成就、第九現見憶念因成就、第十現見自身所經事因成就の一部に該当し、六成就に跨っているはずである。ここでは、完全に該当する第六・第七・第八・第九因成就を指すか。

(60) 論には大因成就の句に入る 註(51)参照。

### 【通釈】

『法華經』の「其最後仏」から「便於中夜、入無余涅槃」までの經文は、『法華論』の文殊師利答成就に説かれる十因成就の第五の現受用大因成就に当たる。『法華文句』では、この箇所を別序の第五の文殊答問序の第三の広曾見答のうち、最後一仏同とする。また最後一仏同を分けて、第一に曾見事与今已同、第二に曾見事与今同、第三に曾見事与今当同とする。第二の曾見事与今同には、曾ての此土の六瑞と曾ての他土の六瑞を示し、第三の曾見事与今当同は、因人同・説法同・時節同・唱滅同・授記同・通經同に分かれる。

## § 1-7-6 第六現見撰取一切諸仏転法輪因成就

【本文】

經「仏滅度後」、至<sup>三</sup>「為人演説」、論名為<sup>二</sup>第六現見撰取一切諸仏転法輪因成就<sup>一</sup>。疏分為<sup>レ</sup>五。經從<sup>二</sup>「仏授記已」、至<sup>三</sup>「入無余涅槃」、一名為<sup>二</sup>時節<sup>一</sup>。從<sup>二</sup>「仏滅度後、妙光」、至<sup>三</sup>「蓮華經」、二出<sup>二</sup>其人<sup>一</sup>。經「滿八十小劫、為人演説」、三明<sup>二</sup>久近<sup>一</sup>。

【訓読】

經の「仏滅度後」より、「為人演説」に至るまでは、論に名づけて第六に現見撰取一切諸仏転法輪因成就と為す。<sup>(61)</sup> 疏には分けて五と為す。經の「仏授記已」従り、「入無余涅槃」に至るまでは、一に名づけて時節と為す。<sup>(63)</sup> 「仏滅度後、妙光」従り、「蓮華經」に至るまでは、二に其の人を出す。<sup>(64)</sup> 經の「滿八十小劫、為人演説」は、三に久近を明かす。<sup>(65)</sup>

【校訂】

底本の「久遠」を「久近」に改める。

【註釈】

(61) 論に名づけて第六に現見撰取一切諸仏転法輪因成就と為す 『法華論』卷上(大正二六・四頁中)。

なお、基撰『法華玄贊』卷二末（大正三四・六八八頁中）には、「第六「仏滅度後、妙光菩薩、持妙法蓮華」下、現見撰取諸仏転法輪因。」とあり、『法華經』に十因成就が配されている。

(62) 疏には分けて五と為す 『法華文句』卷三上（大正三四・三四頁下）に「從「仏授記已」下、第六

通經同。文為<sup>レ</sup>五。一時節、即「仏滅後」也。二出<sup>二</sup>其人<sup>一</sup>、即「妙光」也。三久近、即「八十小劫」也。四所化之衆、即「八子八百」也。五結<sup>二</sup>會古今<sup>一</sup>、即「求名妙徳」等也。」

(63) 一に名づけて時節と為す 註(62)参照。

(64) 二に其の人を為す 註(62)参照。

(65) 三に久近を明かす 註(62)参照。

### 【通釈】

『法華經』の「仏滅度後」から「為人演説」までの經文は、『法華論』の文殊師利答成就に説かれる十因成就の第六の現見撰取一切諸仏転法輪因成就に当たる。『法華文句』では、この箇所を通經同を五つに分けたうちの時節・出其人・明久近とする。

### § 1-7-7 第七現善堅実如来法輪因成就

### 【本文】

經從<sup>二</sup>「日月灯明仏」<sup>一</sup>、至<sup>二</sup>「三菩提」<sup>一</sup>、論名為<sup>二</sup>第七現善堅実如来法輪因成就<sup>一</sup>。疏名為<sup>二</sup>所化衆<sup>一</sup>。

【訓読】

經の「日月灯明仏」従り、「三菩提」に至るまでは、論に名づけて第七に現善堅実如来法輪因成就と為す<sup>(66)</sup>。疏には名づけて所化衆と為す<sup>(67)</sup>。

【註釈】

(66) 論に名づけて第七に現善堅実如来法輪因成就と為す 『法華論』卷上(大正二六・四頁中)。なお、

基撰『法華玄贊』卷二末(大正三四・六八八頁中)には、「第七「日月灯明仏八子、皆師妙光」下、

現見善堅実如来法輪因。」とあり、『法華經』に十因成就が配されている。

(67) 疏には名づけて所化衆と為す 註(62)参照。

【通釈】

『法華經』の「日月灯明仏」から「三菩提」までの經文は、『法華論』の文殊師利答成就に説かれる十因成就の第七の現善堅実如来法輪因成就に当たる。『法華文句』では、この箇所を通經同を五つに分けたうちの第四の所化衆とする。

§ 1-7-8 第八現見能進入因成就

【本文】

經從<sup>二</sup>「是諸王子」<sup>一</sup>、至<sup>二</sup>「皆成仏道」<sup>一</sup>、論名為<sup>二</sup>第八現見能進入因成就<sup>一</sup>。疏亦為<sup>二</sup>所化之衆<sup>一</sup>。

【訓読】

經の「是諸王子」従り、「皆成仏道」に至るまでは、論に名づけて第八に現見能進入因成就と為す<sup>(68)</sup>。疏には亦た所化の衆と為す<sup>(69)</sup>。

【註釈】

(68) 論に名づけて第八に現見能進入因成就と為す 『法華論』卷上(大正二六・四頁中)。なお、基撰

『法華玄贊』卷二末(大正三四・六八八頁中)には、「第八「是諸王子、供養無量」下、現見能進入因。」とあり、『法華經』に十因成就が配されている。

(69) 疏には亦た所化の衆と為す 註(62)参照。

【通釈】



『法華經』の「是諸王子」から「皆成仏道」までの經文は、『法華論』の文殊師利答成就に説かれる十因成就の第八の現見能進入因成就に当たる。『法華文句』では、この箇所を通經同を五つに分けたうちの第四の所化衆とする。

§ 1779 第九現見憶念因成就

【本文】

經「其最後仏」、至<sup>二</sup>「讚歎」、論名為<sup>三</sup>第九現見憶念因成就。疏亦名<sup>三</sup>所化之衆。<sup>一</sup>

【訓読】

經の「其最後仏」より、「讚歎」に至るまでは、論に名づけて第九に現見憶念因成就と為す。<sup>(7)</sup> 疏には亦た所化の衆と名づく。<sup>(7)</sup>

【註釈】

(70) 論に名づけて第九に現見憶念因成就と為す 『法華論』卷上(大正二六・四頁中)。なお、基撰

『法華玄贊』卷二末(大正三四・六八八頁中)には、「第九「其最後成仏者、名曰燃灯」下、現見憶念因。」とあり、『法華經』に十因成就が配されている。

(71) 疏には亦た所化の衆と名づく 註(62)参照。

【通釈】

『法華經』の「其最後仏」から「讚歎」までの經文は、『法華論』の文殊師利答成就に説かれる十因成就の第九の現見憶念因成就に当たるとする。『法華文句』では、この箇所を通經同を五つに分けたうちの第四の所化衆とする。

§ 1-7-10 第十現見自身所經事因成就

【本文】

經從<sub>二</sub>「彌勒當知」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「仏所護念」<sub>一</sub>、論名為<sub>二</sub>第十現見自身所經事因成就<sub>一</sub>。疏名為<sub>二</sub>分明判答<sub>一</sub>。經從<sub>二</sub>「爾時文殊」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「偈言」<sub>一</sub>、此經家序也。經從<sub>二</sub>「我念過去世」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「令入仏智慧」<sub>一</sub>、三行偈頌、論第三現見希有因成就、疏頌<sub>二</sub>最初一仏同<sub>一</sub>。亦分為<sub>三</sub>。一時節同、二名号同、三說法同。經從<sub>二</sub>「仏未出家時」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「而起無量塔」<sub>一</sub>、二十八行偈頌、論第五現見受用大因成就、疏頌<sub>二</sub>最後一仏同<sub>一</sub>。亦分<sub>三</sub>三誦<sub>一</sub>。已同一行、今同十五行半、当同二十二行半。經從<sub>二</sub>「比丘比丘尼」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「広宣法華經」<sub>一</sub>、二行偈頌、論第六現見撰取一切諸仏轉法輪因成就。經從<sub>二</sub>「是諸八王子」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「轉次而授記」<sub>一</sub>、二行偈頌、論第八現見能進入因成就。經從<sub>二</sub>「最後天中天」<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「今則我身是」<sub>一</sub>、七行偈頌、論第九現見憶念因成就。經從<sub>二</sub>

「我見灯明仏<sup>一</sup>」、至<sup>二</sup>「令無尽有余」、四行偈頌、論第十現見自身所經事因成就。此偈頌中、不<sup>レ</sup>頌<sup>二</sup>第一・第二・第四・第七因成就。但頌<sup>二</sup>第三・第五・第六・第八・第九・第十六因成就。論大義因成就者、示<sup>二</sup>現八種大義<sup>一</sup>。疏名為<sup>二</sup>惟付答<sup>一</sup>。論舉<sup>二</sup>所說義<sup>一</sup>、疏依<sup>二</sup>能說思量<sup>一</sup>名<sup>二</sup>惟付<sup>一</sup>。是即惟<sup>二</sup>付八種大義<sup>一</sup>而巳。故無<sup>二</sup>相違<sup>一</sup>。

【校訂】

底本の「如未出家時」を、伝全の頭註に従って「仏未出家時」に改める。

【訓読】

經の「弥勒当知」従り、「仏所護念」に至るまでは、論に名づけて第十に現見自身所經事因成就と為す<sup>(72)</sup>。疏には名づけて分明判答と為す<sup>(73)</sup>。經の「爾時文殊」従り、「偈言」に至るまでは、此れ經家の序なり。經の「我念過去世」従り、「令人仏智恵」に至るまでの、三行の偈頌は、論には第三に現見希有因成就とし、疏には最初一仏同を頌すとす。亦た分けて三と為す。一には時節同、二には名号同、三には説法同なり<sup>(74)</sup>。經の「仏未出家時」従り、「而起無量塔」に至るまでの、二十八行の偈頌は、論には第五に現見受用大因成就とし、疏には最後一仏同を頌すとす。亦た三誦に分つ。巳同は一行、今同は十五行半、当同は二十二行半なり<sup>(75)</sup>。經の「比丘比丘尼」従り、「広宣法華經」に至るまでの、二行の偈頌は、論には第六に現見撰

取一切諸仏転法輪因成就とす。經の「是諸八王子」従り、「転次而授記」に至るまでの、二行の偈頌は、論には第八に現見能進入因成就とす。經の「最後天中天」従り、「今則我身是」に至るまでの、七行の偈頌は、論には第九に現見憶念因成就とす。經の「我見灯明仏」従り、「令無尽有余」に至るまでの、四行の偈頌は、論には第十に現見自身所經事因成就とす。此の偈頌の中に、第一・第二・第四・第七因成就を頌せず。但だ第三・第五・第六・第八・第九・第十の六因成就のみ頌す。論の大義因成就とは、八種の大義を示現す。<sup>(76)</sup> 疏には名づけて惟付答と為す。<sup>(77)</sup> 論は所説の義を挙げて、疏は能説思量に依りて惟付と名づく。是れ即ち八種の大義因を惟付するのみ。故に相違無し。

### 【註釈】

(72) 論に名づけて第十に現見自身所經事因成就と為す 『法華論』卷上(大正二六・四頁中)。なお、基撰『法華玄贊』卷二末(大正三四・六八八頁中)には、「第十「弥勒当知、爾時妙光菩薩」下、現見自身所經事因。」とあり、『法華經』に十因成就が配されている。

(73) 疏には名づけて分明判答と為す 別序の第五の文殊答問序の第四の分明判答のこと。『法華文句』卷三上(大正三四・三五頁上)に「第四從<sup>二</sup>「今見此瑞」下、名<sup>二</sup>分明判答。」とある。

(74) 疏には最初一仏同を頌すとす。亦た分けて三と為す。一には時節同、二には名号同、三には説法同なり 『法華文句』卷三上(大正三四・三五頁上)に「初有<sup>二</sup>兩行。頌<sup>二</sup>広曾見中、時節・名号・説

法等同<sub>一</sub>也。」とある。

(75) 疏には最後一仏同を頌すとす。亦た三誦に分つ。已同は一行、今同は十五行半、当同は二十二行半なり 『法華文句』卷三上(大正三四・三五頁上)に「從<sub>二</sub>「仏未出家」下、第二有<sub>三</sub>三十九行偈<sub>一</sub>。頌<sub>二</sub>最後仏三同<sub>一</sub>。次有<sub>二</sub>四行<sub>一</sub>、頌<sub>二</sub>決定答<sub>一</sub>。就<sub>二</sub>第二・三同中<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>三。初有<sub>二</sub>一行偈<sub>一</sub>。頌<sub>二</sub>曾与<sub>一</sub>已同<sub>一</sub>。次第二有<sub>二</sub>二十五行半<sub>一</sub>。頌<sub>二</sub>曾与<sub>一</sub>今同<sub>一</sub>。第三次有<sub>二</sub>二十二行半<sub>一</sub>。頌<sub>二</sub>曾与<sub>一</sub>当同<sub>一</sub>。」とある。

(76) 論の大義因成就とは、八種の大義を示現す 八種の大義とは、『法華論』卷上(大正二六・四頁上)に「大義因成就者、八句示現。此義<sub>レ</sub>知。何等<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>八。一者欲論大法、二者欲雨大法雨、三者欲擊大法鼓、四者欲建大法幢、五者欲然大法灯、六者欲吹大法蠶、七者欲不斷大法鼓、八者欲説大法、此八句、欲<sub>レ</sub>示<sub>下</sub>現如来欲<sub>レ</sub>論<sub>二</sub>大法<sub>一</sub>等<sub>上</sub>故。」とある。註(41)参照。

(77) 疏には名づけて惟付答と為す 註(42)参照。

### 【通釈】

『法華經』の「弥勒当知」から「仏所護念」までの経文は、『法華論』の文殊師利答成就に説かれる十因成就の第十の現見自身所經事因成就に当たる。『法華文句』では、この箇所を別序の第五の文殊答問序のうち、第四の分明判答とする。ここに含まれる偈頌には、第三・第五・第六・第八・第九・第十の六つの因成就が再説される。

## 【解説】

ここに示される、『法華経』の偈頌には、第一・第二・第四・第七因成就が含まれないとする最澄の記述は、『法華文句』卷三上（大正三四・三五頁上）の「頌有<sub>二</sub>四十五行偈<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>頌<sub>二</sub>上惟付・略曾見答<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>広曾見中<sub>一</sub>、但頌<sub>二</sub>前後<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>頌<sub>二</sub>中間<sub>一</sub>也。」という規定に沿っている。すなわち、惟付答は第一因成就に当たり、略曾見答は第二因成就に当たるため、偈頌には含まれない。また最澄は、広曾見答のうち、中間にあたる第四・第七因成就も、頌には含まれていないと判断する。

さらにここでは、大義因成就と『法華文句』所説の惟付答は、能所に分かれて同義を説いているという少々唐突に感じられる説明が挿入される。

## 方便品

### §2-1 五分科の総説

#### 【本文】

論釈<sub>二</sub>方便品<sub>一</sub>科文第二。

問。論判<sub>二</sub>方便品<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>幾分<sub>一</sub>耶。

答。有<sub>二</sub>五分<sub>一</sub>。

問。用其五分、判經文何也。

答。經文自「爾時世尊、從三昧安祥而起」、至「隨宜所說、意趣難解」、名為「歎妙法功德具足分」。經文自「舍利弗、吾從成仏已來」、至「本末究竟」等偈竟、名為「第二歎法師功德成就分」。經文自「爾時大衆中、難解之法」、名為「第三大衆定疑分」。經文自「仏告舍利弗、如是妙法」、至「何況有三」、名為「第四定記分」。經文自「舍利弗、諸仏出於五濁惡世」、至「無有余乘、唯一仏乘」、名為「第五斷疑分」。偈頌上長行。故不別判也。

問。歎妙法分有幾節耶。

答。有二十三節也。

問。歎法師分幾節耶。

答。亦有二十三節也。

問。大衆定疑分有幾節耶。

答。有三節也。

問。定記分有幾節耶。

答。有一節也。

問。斷疑分有幾節。

答。有四節也。

問。方便品、都合有「幾節」也。

答。有「四十五節」也。

問。其四十五節略頌何如也。

答。頌曰、五甚・八甚、四七成。二五何等、三・四・四。

### 【訓読】

論の方便品を釈する科文第二。

問う。論に方便品を判じて、幾分有りや。

答う。五分有り。<sup>(78)</sup>

問う。其の五分を用て、經文を判ずとは何ん。

答う。經文の「爾時世尊、從三昧安祥而起」自り、「隨宜所説、意趣難解」に至るまでは、名づけて歎妙法功德具足分と為す。經文の「舍利弗、吾從成仏已來」自り、「本末究竟」等と偈の竟りに至るまでは、名づけて第二に歎法師功德成就分と為す。經文の「爾時大衆中、難解之法」自り、名づけて第三に大衆定疑分と為す。經文の「仏告舍利弗、如是妙法」自り、「何況有三」に至るまでは、名づけて第四に定記分と為す。經文の「舍利弗、諸仏出於五濁惡世」自り、「無有余乘、唯一仏乘」に至るまでは、名づけて第五に斷疑分と為す。偈は上の長行を頌す。故に別して判ぜざるなり。



問う。歎妙法分には幾ばくの節有りや。

答う。一十三節有るなり。

問う。歎法師分には幾ばくの節ありや。

答う。亦た一十三節有るなり。

問う。大衆定疑分には幾ばくの節ありや。

答う。三節有るなり。

問う。定記分には幾ばくの節有りや。

答う。一節有るなり。

問う。断疑分には幾ばくの節有らん。

答う。四節有るなり。

問う。方便品には、都合幾ばくの節有りや。

答う。四十五節有るなり。

問う。其の四十五節は略頌とは何如。

答う。頌に曰く、五甚八甚、四七成。二五何等、三・四・四と。

【註釈】

(78) 五分有り 『法華論』方便品は、歎妙法功德具足分・歎法師功德成就分・大衆定疑分・定記分・斷疑分の五つに内容的に区切られる。この五分科の『法華經』への適用は、最澄以前に、『法華玄贊』や『法華文句記』において試みられている。「金二〇一」<sup>1)</sup>、「武本二〇二〇b」<sup>2)</sup>参照。

### 【通釈】

『法華論』の方便品は、歎妙法功德具足分・歎法師功德成就分・大衆定疑分・定記分・斷疑分の五つに内容的に分かれている。この五つの分科を『法華經』の方便品第二の經文に適用するならば、『法華經』の「爾時世尊、從三昧安祥而起」から「隨宜所說、意趣難解」までは、第一歎妙法功德具足分、「舍利弗、吾從成仏已來」から「本末究竟」とその後の偈のおわりまでは、第二歎法師功德成就分、「爾時大衆中、難解之法」からは、第三大衆定疑分、「仏告舍利弗、如是妙法」から「何況有三」までは、第四定記分、「舍利弗、諸仏出於五濁惡世」から「無有余乘、唯一仏乘」までは、第五斷疑分である。歎妙法功德具足分には一三節、歎法師功德成就分には一三節、大衆定疑分には三節、定記分には一節、斷疑分には四節あり、総じて方便品には四五節ある。

### 【解説】

方便品についても序品と同様に、『法華論』の教説によって、『法華經』の經文の分科が行われる。こ

ここでは、『法華経』の方便品第二の全体が、『法華論』方便品に説かれる五分科によって分科されている。ただし、ここで説かれる定記分の『法華経』の経文への配当の規定は、後述される定記分の範囲 (§2-1-5 第四定記分の項を参照) とも、最澄以前に行われていた基や湛然による規定とも異なる。また、『守護国界章』巻中之下(伝全二・四六八頁〜四七〇頁)には、五分科に関する議論が展開される。これらについては、「武本二〇二〇b」参照。また、ここで「頌に曰く」として引用される「五甚八甚、四七成。二五何等、三・四・四。」の文は、歎妙法功德具足分に示される五甚深・八甚深、歎法師功德成就分に示される四成就・七成就と二種の五何、大衆定疑分に示される三種の義、定記分に示される四種の事、断疑分に示される四種の疑を指しているが、偈頌自体に関する詳細は不明である。

### §2-2-1 第一歎妙法功德具足分(五甚深)

#### 【本文】

問。初五甚深者、何釈<sub>二</sub>経句<sub>一</sub>耶。

答。是五甚深者、釈<sub>二</sub>経<sub>一</sub>「諸仏智慧、甚深無量」句。

#### 【校訂】

底本の「釈経句耶」を、伝全の頭註に従って「何釈経句耶」に改める。

【訓読】

問う。初（初）の五甚深とは、何れの経句を積するや。

答う。是（是）の五甚深とは、経の「諸仏智慧、甚深無量」の句を積す。<sup>(79)</sup>

【註釈】

(79) 是（是）の五甚深とは、経の「諸仏智慧、甚深無量」の句を積す 五甚深とは、『法華論』所説の証甚深

(大正二六・五頁上)を指す。『法華論』では、「舍利弗、諸仏智慧、甚深無量。其智慧門、難見

難覺難知難解難入。如來所証、一切声聞辟支仏等所不能知。」の经文(大正二六・四頁下)

に対して、証甚深(義甚深・実体甚深・内証甚深・依止甚深・無上甚深の五つの甚深)が示される。

最澄以前には、智顛や基、湛然といった学匠によつて、証甚深の『法華経』の经文への配当が試みられてゐる。

【通釈】

『法華論』方便品の歎妙法功德具足分に説かれる五甚深は、『法華経』の「諸仏智慧、甚深無量」の经文を解釈している。

§2-2-2 第一款妙法功德具足分(八甚深)

【本文】

問。次八甚深者、<sub>二</sub>經何句<sub>一</sub>耶。

答。是八甚深者、<sub>二</sub>經自<sub>一</sub>「其智慧門」、至<sub>二</sub>「意趣難解」等句文<sub>上</sub>也。

問。是八甚深一一、<sub>二</sub>經文何<sub>一</sub>耶。

答。用<sub>二</sub>受持誦誦甚深<sub>一</sub>、<sub>二</sub>經<sub>一</sub>「<sub>一</sub>仏曾親近百千万億無數仏<sub>一</sub>」。論云<sub>二</sub>「已曾親近供養無量百千万億無數諸  
仏<sub>一</sub>」故。第二用<sub>二</sub>修行甚深<sub>一</sub>、<sub>二</sub>經<sub>一</sub>「<sub>一</sub>尽行諸仏無量道法<sub>一</sub>」。論云<sub>二</sub>「於百千万億那由他仏所、<sub>一</sub>尽行諸仏所修  
阿耨多羅三藐三菩提法<sub>一</sub>」故。第三用<sub>二</sub>要果行甚深<sub>一</sub>、<sub>二</sub>經<sub>一</sub>「<sub>一</sub>勇猛精進<sub>一</sub>」。論云<sub>二</sub>「舍利弗、<sub>一</sub>如来已於無量  
百千万億那由他劫、<sub>一</sub>勇猛精進、所作成就<sub>一</sub>」故。第四用<sub>二</sub>增長功德心甚深<sub>一</sub>、<sub>二</sub>經<sub>一</sub>「<sub>一</sub>名稱普聞<sub>一</sub>」。論同<sub>二</sub>經  
文<sub>一</sub>。第五用<sub>二</sub>快妙事心甚深<sub>一</sub>、<sub>二</sub>經<sub>一</sub>「<sub>一</sub>成就未曾有法<sub>一</sub>」。論云<sub>二</sub>「舍利弗、<sub>一</sub>如来畢竟成就稀有之法<sub>一</sub>」故。第  
六用<sub>二</sub>無上甚深<sub>一</sub>。論牒<sub>二</sub>經<sub>一</sub>「<sub>一</sub>舍利弗、<sub>一</sub>難解之法、如来能知<sub>一</sub>」故。第七用<sub>二</sub>入甚深<sub>一</sub>、<sub>二</sub>經<sub>一</sub>「<sub>一</sub>隨宜所說、  
意趣難解<sub>一</sub>」。論牒<sub>二</sub>經云<sub>一</sub>「<sub>一</sub>舍利弗、<sub>一</sub>難解法者、諸仏如来、隨宜說法、意趣難解<sub>一</sub>」故。第八用<sub>二</sub>不共声聞  
辟支仏所作住持甚深<sub>一</sub>。論牒<sub>二</sub>經<sub>一</sub>「<sub>一</sub>一切声聞辟支仏等所不能知<sub>一</sub>」故。

【校訂】

底本の「第五用快妙事心甚深」を、伝全の頭註に従って「第五用快妙事心甚深」に改める。

### 【訓読】

問う。次に八甚深とは、經の何れの句を積するや。

答う。是の八甚深は、經の「其智慧門」自り、「意趣難解」等に至るまでの句文を積するなり。<sup>(8)</sup>

問う。是の八甚深の一一は、經文の何れを積するや。

答う。受持読誦甚深を用て、經の「仏曾親近百千万億無数仏」を積す。論に「已曾親近供養無量百千万億無数諸仏」と云う故なり。第二に修行甚深を用て、「修行諸仏無量道法」を積す。論に「於百千万億那由他仏所、尽行諸仏所修阿耨多羅三藐三菩提法」と云う故なり。第三に果行甚深を用要て、<sup>も</sup>經の「勇猛精進」を積す。論に「舍利弗、如来已於無量百千万億那由他劫、勇猛精進、所作成就」と云う故なり。第四に增長功德心甚深を用て、經の「名稱普聞」を積す。論も經の文に同じ。第五に快妙事心甚深を用て、經の「成就未曾有法」を積す。論に「舍利弗、如来畢竟成就稀有之法」と云う故なり。第六に無上甚深を用て積す。論に經の「舍利弗、難解之法、如来能知」を牒する故なり。第七に入甚深を用て、經の「随宜所説、意趣難解」を積す。論に經を牒して「舍利弗、難解法者、諸仏如来、随宜説法、意趣難解」と云う故なり。第八に不共声聞辟支仏所作住持甚深を用て積す。論に經の「一切声聞辟支仏等所不能知」を牒する故なり。

【校訂】

底本の「諸仏如来、随宜説」を「諸仏如来、随宜説法」に改める。

【註釈】

(80) 是の八甚深はく句文を釈するなり 八甚深とは、『法華論』所説の阿含甚深（大正二六・五頁上中）を指す。『法華論』では、「舍利弗、如来応正遍知、已曾親<sub>二</sub>近供<sub>三</sub>養無量百千万億無數諸仏、<sub>一</sub>於<sub>二</sub>百千億那由他仏所<sub>一</sub>、尽<sub>二</sub>行諸仏所<sub>一</sub>修阿耨多羅三藐三菩提法」。舍利弗、如来、已於<sub>二</sub>無量百千億那由他劫<sub>一</sub>、勇猛精進、所作成就、名稱普聞。舍利弗、如来、畢竟成<sub>二</sub>就希有之法<sub>一</sub>。舍利弗、難<sub>レ</sub>解之法、如来能知。舍利弗、難<sub>レ</sub>解法者、諸仏如来、随<sub>レ</sub>宜所<sub>レ</sub>説。意趣難<sub>レ</sub>解。一切声聞辟支仏等所<sub>レ</sub>不能<sub>レ</sub>知。」の經文（大正二六・四頁下）に対して、阿含甚深（受持読誦甚深・修行甚深・果行甚深・增長功德心甚深・快妙事心甚深・無上甚深・入甚深・不共声聞辟支仏所作住持甚深の八つの甚深）が示される。阿含甚深についても証甚深と同様、最澄以前には、智顛や基、湛然といった学匠によつて、阿含甚深の『法華經』の經文への配当が試みられている。

【通釈】

『法華論』方便品の歎妙法功德具足分に説かれる八甚深（受持読誦甚深・修行甚深・果行甚深・增長功德心甚深・快妙事心甚深・無上甚深・入甚深・不共声聞辟支仏所作住持甚深）は、『法華經』の「其智慧門」から「意趣難解」等までの經文を解釈している。

### 【解説】

ここでは、『法華論』所引の經文と阿含甚深、及び『法華經』の經文の対応関係が示されているが、第六無上甚深・第八不共声聞辟支仏所作住持甚深については、『法華經』の經文との対応が示されていない。この点に関する最澄の説は、『守護国界章』卷中之下（伝全二・四七〇頁）において述べられる。「武本二〇二〇a」参照。

### § 2-3-1 第二歎法師功德成就分（四成就）

#### 【本文】

問。用<sub>二</sub>四成就<sub>一</sub>、积<sub>二</sub>何經文<sub>一</sub>耶。

答。初用<sub>二</sub>住成就<sub>一</sub>积。論牒<sub>二</sub>經「舍利弗、如来成就種種方便」<sub>一</sub>故。第二用<sub>二</sub>教化成就<sub>一</sub>积。論牒<sub>二</sub>經「種種知見」<sub>一</sub>故也。第三用<sub>二</sub>功德畢竟成就<sub>一</sub>积。論牒<sub>二</sub>經「種種念觀」<sub>一</sub>故。第四用<sub>二</sub>說成就<sub>一</sub>积。論牒<sub>二</sub>經「種種言辭」<sub>一</sub>故。又復有<sub>レ</sub>義。用<sub>二</sub>住成就「種種方便」<sub>一</sub>、积<sub>二</sub>經「舍利弗、吾從成仏已來、種種因縁、種種譬喩、



広演言教、無数方便、引導衆生、令離諸著」。積論牒<sub>三</sub>經「舍利弗、吾從成仏已來、広演言教、無数方便、引導衆生、於諸著処、令得解脫」故。復用<sub>三</sub>教化成就「種種知見」、積<sub>三</sub>經「所以者何、如來方便知見波羅蜜、皆已具足」。積論牒<sub>三</sub>經「舍利弗、如來知見方便、到於彼岸」故。復用<sub>三</sub>功德畢竟成就「種種念觀」、積<sub>三</sub>經「如來知見、廣大深遠、無量無礙、力無所畏、禪定解脫三昧」。積論牒<sub>三</sub>經「舍利弗、如來知見、廣大深遠、無障・無礙・力・無所畏不共等法・根・力・菩提分・禪定・解脫・三昧・三摩跋提、皆已具足」故。

### 【訓読】

問う。四成就<sup>(8)</sup>を用て、何れの經文を積するや。

答う。初に住成就を用て積す。論に經の「舍利弗、如來成就種種方便」を牒する故なり。第二に教化成就を用て積す。論に經の「種種知見」を牒する故なり。第三に功德畢竟成就を用て積す。論に經の「種種念觀」を牒する故なり。第四に說成就を用て積す。論に經の「種種言辭」を牒する故なり。又復た義有り。住成就の「種種方便」を用て、經の「舍利弗、吾從成仏已來、種種因縁、種種譬喩、広演言教。無数方便。引導衆生。令離諸著」を積す。積論に經の「舍利弗、吾從成仏已來、広演言教、無数方便、引導衆生、於諸著処、令得解脫」を牒する故なり。復た教化成就の「種種知見」を用て、經の「所以者何、如來方便知見波羅蜜、皆已具足」を積す。積論に經の「舍利弗、如來知見方便、到於彼岸」を牒する故なり。復た功

徳畢竟成就の「種種念觀」を用て、經の「如来知見、广大深遠、無量無礙、力無所畏、禪定解脫三昧」を積す。積論に經の「舍利弗、如来知見、广大深遠、無障・無礙・力・無所畏不共等法・根・力・菩提分・禪定・解脫・三昧・三摩跋提、皆已具足」を牒する故なり。

### 【校訂】

底本の「初用往成就積」を、伝全の頭註に従つて「初用住成就積」に改める。

底本の「用往成就種種方便」を、「用住成就種種方便」に改める。

### 【註釈】

(81) 四成就 『法華論』では、「舍利弗、諸仏如来、自在説<sub>二</sub>因成就<sub>一</sub>故。舍利弗、如来成<sub>二</sub>就種種方便<sub>一</sub>。種種知見・種種念觀・種種言辭。舍利弗、吾從<sub>二</sub>成仏<sub>一</sub>已来、於<sub>二</sub>彼彼處<sub>一</sub>、広演<sub>二</sub>言教<sub>一</sub>、無数方便、引<sub>二</sub>導衆生<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>諸著處<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>解脫<sub>一</sub>。舍利弗、如来知見方便、到<sub>二</sub>於彼岸<sub>一</sub>。舍利弗、如来知見、广大深遠、無障・無礙・力・無所畏・不共法・根・力・菩提分・禪定・解脫・三昧・三摩跋提、皆已具足。」の經文(大正二六・四頁下)に対して、住成就・教化成就・功德畢竟成就・説成就の四つの成就が説かれる(大正二六・五頁中下)。

【通釈】

『法華論』方便品の歎法師功德成就分に説かれる四成就（住成就・教化成就・功德畢竟成就・説成就）は、『法華經』の「舍利弗、吾從成仏已來」から「力無所畏、禪定解脫三昧」までの經文を解釈している。

§2-3-2 第二歎法師功德成就分（七成就）

【本文】

又用<sub>二</sub>説成就「種種言辭」<sub>一</sub> 积、經有<sub>二</sub>七文<sub>一</sub>。即七成就。第一用<sub>二</sub>種種成就、积<sub>二</sub>經「深入無際、成就一切未曾有法」<sub>一</sub>。論牒<sub>二</sub>經文「舍利弗、諸仏如來、深入無際、成就一切未曾有法」<sub>一</sub> 故。第二用<sub>二</sub>言語成就、积<sub>二</sub>經「舍利弗、如來能種種分別、巧説諸法、言辭柔軟、悅可衆心」<sub>一</sub>。論牒<sub>二</sub>經文「如來能種種分別、巧説諸法、言辭柔軟、悅可衆心」<sub>一</sub> 故。第三相成就、积<sub>二</sub>經文「舍利弗、取要言之、無量無辺未曾有法、仏悉成就。止舍利弗、不須復説」<sub>一</sub>。論牒<sub>二</sub>經文「止舍利弗、不須復説」<sub>一</sub> 故。第四堪成就、积<sub>二</sub>經文「所以者何、仏所成就、第一希有、難解之法」<sub>一</sub>。論牒<sub>二</sub>經文「舍利弗、仏所成就第一希有難解之法」<sub>一</sub> 故。第五無量種成就、积<sub>二</sub>經文「唯仏与仏、乃能究尽、諸法実相」<sub>一</sub>。論牒<sub>二</sub>經文「舍利弗、唯仏与仏説法、諸仏如來、能知彼法究竟実相」<sub>一</sub> 也。第六用<sub>二</sub>覺体成就、成积。論牒<sub>二</sub>經「舍利弗、唯仏如來、知一切法」<sub>一</sub> 故。第七用<sub>二</sub>隨順衆生意為説修行法成就<sub>一</sub> 积。論牒<sub>二</sub>經文「舍利弗、唯仏如來、能説一切法」<sub>一</sub> 故。

## 【訓読】

又説成就の「種種言辭」を用て積するに、經に七文有り。即ち七成就なり。<sup>(82)</sup>第一に種種成就を用て、經の「深入無際、成就一切未曾有法」を積す。論に經文の「舍利弗、諸仏如来、深入無際、成就一切未曾有法」を牒する故なり。第二に言語成就を用て、經の「舍利弗、如来能種種分別、巧説諸法、言辞柔軟、悦可衆心」を積す。論に經文の「如来能種種分別、巧説諸法、言辞柔軟、悦可衆心」を積す。論に經文の「如来能種種分別、巧説諸法、言辞柔軟、悦可衆心」を牒する故なり。第三に相成就是、經文の「舍利弗、取要言之、無量無辺未曾有法、仏悉成就。止舍利弗、不須復説」を積す。論に經文の「止舍利弗、不須復説」を牒する故なり。第四に堪成就是、經文の「所以者何、仏所成就、第一希有、難解之法」を積す。論に經文の「舍利弗、仏所成就第一希有難解之法」を牒する故なり。第五に無量種成就是、經文の「唯仏与仏、乃能究尽、諸法実相」を積す。論に經文の「舍利弗、唯仏与仏説法、諸仏如来、能知彼法究竟実相」を牒するなり。第六に覺体成就を用て成積す。論に經の「舍利弗、唯仏如来、知一切法」を牒する故なり。第七に隨順衆生意為説修行法成就を用て積す。論に經文の「舍利弗、唯仏如来、能説一切法」を牒する故なり。

## 【註釈】

(82) 説成就の「種種言辭」を用て積するに、經に七文有り。即ち七成就なり 『法華論』では、四成就

の第四の説成就を開いて七成就とする。『法華論』所引の「舍利弗、諸仏如来、深入<sup>二</sup>無際、成<sup>三</sup>就一切未曾有法<sup>一</sup>。舍利弗、如来、能種種分別、巧説<sup>二</sup>諸法、言辞柔軟、悦<sup>三</sup>可衆心<sup>一</sup>。止舍利弗、不<sup>レ</sup>須<sup>二</sup>復説<sup>一</sup>。舍利弗、仏所<sup>二</sup>成就<sup>一</sup>、第一希有難解之法。舍利弗、唯仏与<sup>レ</sup>仏説<sup>レ</sup>法。諸仏如来、能知<sup>二</sup>彼法究竟実相<sup>一</sup>。舍利弗、唯仏如来、知<sup>二</sup>一切法<sup>一</sup>。舍利弗、唯仏如来、能説<sup>二</sup>一切法<sup>一</sup>。」の経文（大正二六・四頁下）に対して、種種成就・言語成就・相成就・堪成就・無量種成就・覚体成就・随順衆生意為説修行法成就の七つの成就が説かれる（大正二六・六頁上）。

### 【通釈】

『法華論』方便品の歎法師功德成就分に説かれる四成就のうち、第四の説成就を開くと七成就になる。すなわち、種種成就・言語成就・相成就・堪成就・無量種成就・覚体成就・随順衆生意為説修行法成就である。第六覚体成就と第七随順衆生意為説修行法成就を除く五成就是、『法華経』の「深入無際、成就一切未曾有法<sup>一</sup>」から「唯仏与<sup>レ</sup>仏、乃能究尽、諸法実相<sup>一</sup>」までの経文を解釈している。

### 【解説】

ここで最澄は、『法華論』の第六・第七成就について、『法華経』の経文に配当せず、四成就・七成就に関する議論が行われる『守護国界章』巻中之下（伝全二・四七〇頁〜四七二頁）においても、最澄の解

答は出されない。

なお、この箇所に関する最澄以前の釈義には、智顛、基、智度といった学匠の解釈がある。智顛は、『法華文句』卷三下（大正三四・三八頁中下）において、十法の権実のうち、「因果・漸頓・開合・通別（利益）・悉壇・事理」の六つの権実を介在させることによつて、『法華論』所引の經文と四成就・七成就、そして『法華經』の經文を会釈しようと試みている。ただし、智顛の試みには、成就に関する表記に若干の問題点があるため、湛然は、『文句記』卷四上（大正三四・二一六頁中下）において、以下のように註解している。

論從<sub>レ</sub>此後、復立<sub>二</sub>如来四種功德<sub>一</sub>。因果権実、是一者初住成就。漸頓権実、是第二教化成就、此中闕<sub>レ</sub>一、開合権実。余与<sub>レ</sub>論不<sub>レ</sub>同。亦不<sub>レ</sub>須<sub>二</sub>和会<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>論文增<sub>レ</sub>句、今但直对。

湛然は、因果の権実が四成就の第一住成就に、頓漸の権実が四成就の第二教化成就に配当されることを記すが、四成就の第三功德畢竟成就以降の解釈については断念している。この断念は、『法華五百問論』卷上（続藏二一五・三四九丁左下）においても見られる。

問、「無量無礙」去、其義云何。

答曰、論中牒<sub>レ</sub>經、增<sub>二</sub>十八不共・五根・五力及菩提分<sub>一</sub>。今謂、準<sub>二</sub>此論文<sub>一</sub>、亦是增<sub>レ</sub>句、解<sub>二</sub>釋經<sub>一</sub>也。故不<sub>レ</sub>得<sub>下</sub>与<sub>二</sub>經中<sub>一</sub>、並列為<sub>レ</sub>对而积<sub>上</sub>。如<sub>二</sub>八句・五難<sub>一</sub>即其例也。

すなわち湛然は、『法華經』方便品第二の「無量・無礙・力・無所畏・禪定・解脱・三昧」の經文（大

正九・五頁下) について、『法華論』方便品(大正二六・四頁下)では、「十八不共法・五根・五力・菩提分」の句が補われていることに言及し、『法華論』序品の「欲論大法・欲雨大法雨・欲擊大法鼓・欲建大法幢・欲然大法灯・欲吹大法蠡・欲不斷大法鼓・欲說大法」の八大義の句 (§ 1-7-1 第一現見大義因成就の項を参照) や方便品の「難見・難覺・難知・難解・難入」の五難の句(大正二六・四頁下)が、『法華經』の經文と比べて増広されているように、『法華經』と『法華論』所引の經文を対応させて解釈することはできないことを述べる。なお、ここで取り上げられている『法華經』方便品第二の「舍利弗、如来知見、廣大深遠。無量・無礙・力・無所畏・禪定・解脫・三昧。」の經文、及び『法華論』所引の「舍利弗、如来知見、廣大深遠。無障・無礙・力・無所畏・不共法・根・力・菩提分・禪定・解脫・三昧・三摩跋提、皆已具足。」の經文は、四成就の第三功德畢竟成就に当たたる文である。

他方で基は、『法華玄贊』卷三本(大正三四・六九八頁中く七〇四頁中)において、四成就・七成就の『法華經』の經文への配当を試みている。基は、四成就と『法華經』の經文の対応関係について述べた後で、七成就と『法華經』の經文の対応関係を以下のように論じる(大正三四・七〇三頁中下)。

以<sub>二</sub>七句<sub>一</sub>、积<sub>二</sub>第四言詞<sub>一</sub>。此經、唯有<sub>二</sub>初之五句<sub>一</sub>、第六句闕、第七句少。……此經、脱<sub>二</sub>第六覺体成就<sub>一</sub>。「如来能知一切法」、仏自証得故。亦少<sub>二</sub>第七隨順衆生意為說修行法成就<sub>一</sub>。「如来能說一切法」故。此經所言、「所謂、諸法如是相」等、是。此第七所<sub>レ</sub>說諸法、仏所<sub>レ</sub>現見、無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>不見。

ここで基は、『法華論』の四成就の第四の説成就(種種言辭)を開くと七句(七成就)があり、『法華

『經』の經文では、そのうちの第五無量種成就までが対応すると述べる。その上で、第六覺体成就は、『法華經』の經文にはなく、第七隨順衆生意為説修行法成就については、「少」と述べながらも、『法華經』の十如是の經文に配対させている。なお、湛然の門弟とされる智度は、『法華經疏義續』卷三（統藏一・四五・二三一丁右下～二三二丁右上）において、『法華玄贊』の所説に依りつつも、天台義を用いて、四成就・七成就と『法華經』の經文を解釈している。このことは、同じく湛然の門弟である、道暹の『法華經文句輔正記』卷三の記述（統藏一・四五・五八丁右上）や智雲の『妙經文句私志記』卷十の記述（統藏一・四六・九四丁左上～九六丁右上）には、特筆すべき積義がないのと対照的であり、注目すべき点である。また、四成就・七成就について、最澄以降では、証真が『法華疏私記』卷三末（仏全二一・四八六頁上～四八七頁上）において、智顛の教説の矛盾点を消釈する解答を提示している。

§2-4 第二歎法師功德成就分（五何）・第三大衆定疑分（三義）

【本文】

問。其五何等、釈<sub>二</sub>經何文<sub>一</sub>耶。

答。用<sub>二</sub>二五何等句、釈<sub>二</sub>經十如是文<sub>一</sub>也。

問。其二五何等、相<sub>二</sub>当十如是<sub>一</sub>何耶。

答。有<sub>二</sub>三義<sub>一</sub>也。



問。其三義中、初決定義、积<sub>二</sub>経何文<sub>一</sub>耶。

答。用<sub>二</sub>其初決定義<sub>一</sub>、积<sub>下</sub>経自<sub>二</sub>「爾時大衆中<sub>一</sub>」、至<sub>中</sub>「亦得此法、到於涅槃<sub>上</sub>」也。

問。用<sub>二</sub>其第二疑義<sub>一</sub>、积<sub>二</sub>経何文<sub>一</sub>耶。

答。用<sub>二</sub>第二疑義<sub>一</sub>、积<sub>二</sub>経「而今不知是義所趣<sub>一</sub>」文。

問。用<sub>二</sub>其第三依何事疑義<sub>一</sub>、积<sub>二</sub>経何文<sub>一</sub>耶。

答。用<sub>二</sub>其第三依何事疑義<sub>一</sub>、积<sub>下</sub>経「爾時舍利弗<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>「而説偈言<sub>一</sub>」文<sub>上</sub>。

### 【校訂】

底本の「用其第三依何等疑義、积<sub>二</sub>経何文<sub>一</sub>耶」を、伝全の頭註に従って「用其第三依何事疑義、积<sub>二</sub>経何文<sub>一</sub>耶」に改める。

### 【訓読】

問う。其の五何等は、経の何れの文を积するや。

答う。二の五何等の句を用て、<sup>(83)</sup>経の十如是の文を积するなり。

問う。其の二の五等は、十如是に相い当たるとは何ぞや。

答う。三義<sup>(84)</sup>有るなり。

問う。其の三義の中の、初の決定義は、經の何れの文を積するや。

答う。其の初の決定義を用て、經の「爾時大衆中」自り、「亦得此法、到於涅槃」に至るまでを積するなり。

問う。其の第二の疑義を用て、經の何れの文を積するや。

答う。第二の疑義を用て、經の「而今不知是義所趣」の文を積す。

問う。其の第三の依何事疑義を用て、經の何れの文を積するや。

答う。其の第三の依何事疑義を用て、經の「爾時舍利弗」より、「而説偈言」に至るまでの文を積す。

### 【註釈】

(83) 二の五何等の句 『法華論』方便品の歎法師功德成就分では、「何等法・云何法・何似法・何相

法・何体法。何等・云何・何似・何相・何体、如<sub>レ</sub>是等一切法、如来現見、非<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>現見<sub>一</sub>。」の經文

(大正二六・四頁下) に対して、与証法と与説法の二種に互つて、五何(何等法・云何法・何似

法・何相法・何体法) が解説される(大正二六・六頁上中)。

(84) 三義 『法華論』方便品の大衆定疑分には、「決定義者、……如<sub>二</sub>經「爾時大衆中、有諸声聞漏尽阿

羅漢」次第、乃至「亦得此法、到於涅槃」故。言疑義者、……如<sub>二</sub>經「而今、不知是義所趣」故。

依何事疑義者、……如<sub>二</sub>經「爾時舍利弗、知四衆心疑」次第、乃至「而説偈言<sub>一</sub>。」とあり、決定

義・疑義・依何事疑義の三義が説かれる（大正二六・六頁中下）が、『法華論』内に該当する経文自体が示されることはない。これに関して、大竹晋氏は、「おそらく、この「経に……如し」という文全体が原梵文になく、翻訳の際の不適切な補いだろう。」と結論付けている。「大竹二〇一―二二三頁・註一九、二二四頁・註三、註一〇参照。

【通釈】

『法華論』方便品の歎法師功德成就分には、与証法と与説法の、二種の五何（何等法・云何法・何似法・何相法・何体法）が説かれる。これら二種の五何は、『法華経』の十如是の経文を解釈している。また『法華論』方便品の大衆定疑分に説かれる三義（決定義・疑義・依何事疑義）は、『法華経』の「爾時大衆中、有諸声聞」から「爾時舍利弗、欲重宣此義、而説偈言」までの経文を解釈している。

§2-5 第四定記分（四記）

【本文】

問。其四記初決定心、釈<sub>二</sub>経何文<sub>一</sub>耶。

答。此決定心者、是義、出也。不<sub>三</sub>是釈<sub>二</sub>経文<sub>一</sub>也。

問。用<sub>二</sub>第二因授記<sub>一</sub>、釈<sub>二</sub>経何文<sub>一</sub>耶。

答。用<sub>二</sub>第二因授記、<sub>一</sub>積<sub>下</sub>經自<sub>三</sub>「爾時仏、告舍利弗、止止不須復說<sub>一</sub>」、至<sub>三</sub>「是等聞此法、則生大歡喜<sub>一</sub>」文。<sub>上</sub>

問。用<sub>二</sub>其第三取授記、<sub>一</sub>積<sub>二</sub>經何文<sub>一</sub>耶。

答。用<sub>二</sub>其第三取授記、<sub>一</sub>積<sub>下</sub>經自<sub>三</sub>「爾時世尊、告舍利弗、汝已慳懃三請<sub>一</sub>」、至<sub>三</sub>「願樂欲聞<sub>一</sub>」文。<sub>上</sub>

問。用<sub>二</sub>其第四與授記、<sub>一</sub>積<sub>二</sub>經何文<sub>一</sub>耶。

答。用<sub>二</sub>與授記、<sub>一</sub>積<sub>二</sub>經文<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>二。一惣、二別。

問。其惣・別何耶。

答。惣積者、積<sub>下</sub>經自<sub>二</sub>「仏告舍利弗、如是妙法<sub>一</sub>」、至<sub>三</sub>「尚無<sub>二</sub>乘、何況有<sub>三</sub><sub>上</sub>」文。<sub>上</sub>

問。其別積何也。

答。別積有<sub>二</sub>六種<sub>一</sub>。

問。其六種何耶。

答。其別積六者、一者未聞令聞、二者說、三者依何等義、四者令住、五者依法、六者遮。

問。用<sub>二</sub>初未聞令聞、<sub>一</sub>積<sub>二</sub>經何文<sub>一</sub>耶。

答。用<sub>二</sub>初未聞令聞、<sub>一</sub>積<sub>下</sub>經自<sub>三</sub>「仏告舍利弗、如是妙法<sub>一</sub>」、至<sub>三</sub>「言不虛妄<sub>一</sub>」文。<sub>上</sub>

問。用<sub>二</sub>第二說、<sub>一</sub>積<sub>二</sub>經何文<sub>一</sub>耶。

答。用<sub>二</sub>第二說、<sub>一</sub>積<sub>下</sub>經自<sub>三</sub>「舍利弗、諸仏隨宜說法<sub>一</sub>」、至<sub>三</sub>「乃能知之<sub>一</sub>」文。<sub>上</sub>

問。用<sub>二</sub>第三依何等義<sub>一</sub>、积<sub>二</sub>經何文<sub>一</sub>耶。

答。用<sub>二</sub>第三依何等義<sub>一</sub>、积<sub>下</sub>經自<sub>二</sub>「所以者何、諸仏世尊、唯以一大事<sub>一</sub>」、至<sub>二</sub>「仏之知見、示悟衆生<sub>一</sub>」文<sub>上</sub>。

問。用<sub>二</sub>第四令住<sub>一</sub>、积<sub>二</sub>經何文<sub>一</sub>耶。

答。用<sub>二</sub>第四令住<sub>一</sub>、积<sub>下</sub>經自<sub>二</sub>「舍利弗、如来、但以一仏乗故<sub>一</sub>」、至<sub>二</sub>「若<sub>二</sub>若三<sub>一</sub>」文<sub>上</sub>。

問。用<sub>二</sub>第五依法<sub>一</sub>、积<sub>二</sub>經何文<sub>一</sub>耶。

答。用<sub>二</sub>第五依法<sub>一</sub>、积<sub>下</sub>經自<sub>二</sub>「舍利弗、一切十方<sub>一</sub>」、至<sub>二</sub>「何況有三<sub>一</sub>」文<sub>上</sub>。

### 【校訂】

底本の「如是如是妙法」を、伝全の頭註に従って「如是妙法」に改める。

### 【訓読】

問う。其の四記<sup>(85)</sup>の初の決定心は、經の何れの文を积するや。

答う。此の決定心は、是の義、出づるなり。是れ經文を积さず。

問う。第二の因授記を用て、經の何れの文を积するや。

答う。第二の因授記を用て、經の「爾時仏、告舍利弗、止止不須復説」自り、「是等聞此法、則生大歡

喜」に至るまでの文を积す。

問う。其の第三の取授記を用て、經の何れの文を積するや。

答う。其の第三の取授記を用て、經の「爾時世尊、告舍利弗、汝已慇懃三請」自り、「願樂欲聞」に至るまでの文を積す。

問う。其の第四の与授記を用て、經の何れの文を積するや。

答う。与授記を用て、經文を積するに二有り。一には惣、二には別なり。

問う。其の惣・別とは何ぞや。

答う。惣釈とは、經の「仏告舍利弗、如是妙法」自り、「尚無二乘、何況有三」に至るまでの文を積す。

問う。其の別釈とは何ぞや。

答う。別釈に六種有り。

問う。其の六種とは何ぞや。

答う。其の別釈の六とは、一には未聞令聞、二には説、三には依何等義、四には令住、五には依法、六には遮なり。

問う。初の未聞令聞を用て、經の何れの文を積するや。

答う。初の未聞令聞を用て、經の「仏告舍利弗、如是妙法」自り、「言不虛妄」に至るまでの文を積す。

問う。第二の説を用て、經の何れの文を積するや。

答う。第二の説を用て、經の「舍利弗、諸仏隨宜說法」自り、「乃能知之」に至るまでの文を積す。

問う。第三の依何等義を用て、経の何れの文を釈するや。

答う。第三の依何等義を用て、経の「所以者何、諸仏世尊、唯以一大事」自り、「仏之知見、示悟衆生」に至るまでの文を釈す。

問う。第四の令住を用て、経の何れの文を釈するや。

答う。第四の令住を用て、経の「舍利弗、如来、但以一仏乗故」自り、「若二若三」に至るまでの文を釈す。

問う。第五の依法を用て、経の何れの文を釈するや。

答う。第五の依法を用て、経の「舍利弗、一切十方」自り、「何況有三」に至るまでの文を釈す。

### 【註釈】

(85) 四記 『法華論』方便品の定記分には、決定心・因授記・取授記・与授記の四記が説かれる。その

うち、因授記・取授記・与授記の三記について、経文との対応関係が説かれる(大正二六・六頁下(七頁中)が、註(84)の三義と同様、『法華論』内に該当する経文自体が示されることはない。

### 【通釈】

『法華論』方便品の定記分には、決定心・因授記・取授記・与授記の四記が説かれる。第一の決定心は

『法華經』の經文に配当されないが、因授記・取授記・与授記は、『法華經』の「爾時仏、告舍利弗、止不須復説」から「何況有三」までの經文を解釈している。また、第四の与授記には、惣釈と別釈があり、別釈には未聞令聞・説・依何等義・令住・依法・遮の六種がある。

### 【解説】

ここでは、第四の与授記の別釈のうち、第六の遮が、『法華經』の經文のどの部分を釈するかについての言及が欠如している。なお、『法華論』には、「遮者、如<sub>二</sub>經「舍利弗、十方世界中、尚無二乘、何況有三」如<sub>レ</sub>是等故。」とあり、『法華玄贊』卷三末（大正三四・七〇九頁下）では、「六者、遮。「舍利弗、十方世界中、尚無二乘」下是。」と規定している。

また、『守護国界章』卷中之下（伝全二・四七九頁く四八五頁）には、『法華經』の「一大事」の句と与授記の別釈の第三の依何等義について、議論が展開される。

### § 2-6 第五断疑分

#### 【本文】

問。断疑分有<sub>二</sub>幾節<sub>一</sub>耶。

答。有<sub>二</sub>四節<sub>一</sub>也。



問。其四節何也。

答。其四節者、一疑何時説、二疑云何知是増上慢人、三疑云何堪説、四疑云何如来不成妄語。

問。何時説、积<sub>二</sub>経何文<sub>一</sub>耶。

答。用<sub>二</sub>何時説<sub>一</sub>、积<sub>下</sub>経自<sub>二</sub>「舍利弗、諸仏出於五濁惡世<sub>一</sub>」、至<sub>中</sub>「皆是増上慢人<sub>上</sub>」。

問。用<sub>二</sub>云何知是増上慢人<sub>一</sub>、积<sub>二</sub>経何文<sub>一</sub>耶。

答。用<sub>二</sub>云何是増上慢人<sub>一</sub>、积<sub>下</sub>経自<sub>二</sub>「所以者何、若有比丘<sub>一</sub>」、至<sub>三</sub>「無有是処<sub>一</sub>」文<sub>上</sub>。

問。用<sub>二</sub>云何堪<sub>一</sub>、积<sub>二</sub>経何文<sub>一</sub>耶。

答。用<sub>二</sub>云何堪説<sub>一</sub>、积<sub>下</sub>経自<sub>二</sub>「除仏滅度後<sub>一</sub>」、至<sub>三</sub>「便得決了<sub>一</sub>」文<sub>上</sub>。

問。用<sub>二</sub>云何如来不成妄語<sub>一</sub>、积<sub>二</sub>経何文<sub>一</sub>耶。

答。用<sub>二</sub>云何如来不成妄語<sub>一</sub>、积<sub>下</sub>経自<sub>二</sub>「舍利弗汝等<sub>一</sub>」、至<sub>三</sub>「唯一仏乘<sub>一</sub>」文<sub>上</sub>。

【訓読】

問う。断疑分に幾ばくの節有りや。

答う。四節有るなり。

問う。其の四節<sup>(86)</sup>とは何ぞや。

答う。其の四節とは、一には疑何時説、二には疑云何知是増上慢人、三には疑云何堪説、四には疑云何如

来不成妄語なり。

問う。何時説には、經の何れの文を釈するや。

答う。何時説を用て、經の「舍利弗、諸仏出於五濁惡世」自り、「皆是増上慢人」に至るまでを釈す。

問う。云何知是増上慢人を用て、經の何れの文を釈するや。

答う。云何是増上慢人を用て、經の「所以者何、若有比丘」自り、「無有是処」に至るまでの文を釈す。

問う。云何堪説を用て、經の何れの文を釈するや。

答う。云何堪説を用て、經の「除仏滅度後」自り、「便得決了」に至るまでの文を釈す。

問う。云何如来不成妄語を用て、經の何れの文を釈するや。

答う。云何如来不成妄語を用て、經の「舍利弗、汝等」自り、「唯一仏乘」に至るまでの文を釈す。

### 【註釈】

(86) 四節 『法華論』方便品の断疑分には、疑何時説・疑云何知是増上慢人・疑云何堪説・疑云何如来不成妄語の四節が、經文との対応関係とともに説かれる(大正二六・七頁下)が、註(84)の三義や註(85)の四記と同様、『法華論』内に該当する經文自体が示されることはない。

### 【通釈】

『法華論』方便品の断疑分に説かれる四節（疑何時説・疑云何知是増上慢人・疑云何堪説・疑云何如来不成妄語）は、『法華経』の「舍利弗、諸仏出於五濁悪世」から「無有余乘、唯一仏乘」までの経文を解釈している。

### 譬喩品

### §3 譬喩品

#### 【本文】

論釈<sup>二</sup>法華譬喩品<sup>一</sup>科文第三。

用<sup>二</sup>火宅譬<sup>一</sup>、釈<sup>二</sup>譬喩品<sup>一</sup>。有<sup>レ</sup>喩、有<sup>レ</sup>平、無<sup>レ</sup>上。用<sup>二</sup>乘平等<sup>一</sup>、釈<sup>二</sup>舍利弗受記<sup>一</sup>。

第一火宅喩。為<sup>レ</sup>对<sup>三</sup>治求<sup>レ</sup>勢人、顛倒求<sup>二</sup>諸功德増上慢心<sup>一</sup>、説<sup>二</sup>火宅喩<sup>一</sup>。

問。其増上慢心何耶。

答。顛倒求<sup>二</sup>諸功德増上慢心<sup>一</sup>、謂世間中、諸煩惱染、熾然増上、而求<sup>二</sup>天人勝妙境界有漏果報<sup>一</sup>。对<sup>三</sup>治此<sup>一</sup>故、為説<sup>二</sup>火宅譬喩<sup>一</sup>、応<sup>レ</sup>知。第一人者、示<sup>二</sup>世間中、種種善根・三昧功德方便<sup>一</sup>、令<sup>レ</sup>喜。然後、令<sup>レ</sup>入<sup>二</sup>大涅槃<sup>一</sup>故。

#### 【訓読】

論の法華の譬喩品を釈する科文第三。

火宅の譬えを用て、譬喩品を釈す。喩有り、平有り、上無し。乘平等を用いて、舍利弗の受記を釈す。

第一には火宅喩なり。勢を求むる人の、顛倒して諸の功德を求むる増上慢心を対治せんが為に、火宅喩を説く。

問う。其の増上慢心とは何ぞや。

答う。顛倒して諸の功德を求むる増上慢心とは、謂く世間の中の、諸の煩惱に染せられ、熾然増上して、而して天人の勝妙の境界なる有漏の果報を求む。此れを対治するが故に、為に火宅の譬喩を説くと、応に知るべし。第一の人には、世間の中の、種種の善根・三昧の功德もて、方便を示して、喜ばしむ。然る後に、大涅槃に入らしむるが故なり<sup>(87)</sup>。

【註釈】

(87) 第一には火宅喩なり。→大涅槃に入らしむるが故なり 『法華論』卷下(大正二六・八頁中)。

【解説】

『法華論科文』では、譬喩品以降は、『法華論』所説の七喩・三平等・十無上を引用することによって解釈が行われる。七喩とは、(一)火宅喩(二)窮子喩(三)雲雨喩(四)化城喩(五)繫珠喩(六)明珠喩(七)医師喩であり、それ

ぞれ(一)勢力を求むる人(二)声聞の解脱を求むる人(三)大乘の人(四)定有る人(五)定無き人(六)功德を集むる人(七)功德を集めざる人の増上慢心を対治するために説かれる。また、三平等とは、(一)乘平等(二)世間涅槃平等(三)身平等であり、それぞれ(一)種類の乗の異なることを信ずる染慢(二)世間と涅槃との異なることを信ずる染慢(三)彼此の身の異なることを信ずる染慢を対治するために説かれる。そして、十無上とは、(一)種子無上(二)現行無上(三)増上力無上(四)令解無上(五)清浄国土無上(六)説無上(七)教化衆生無上(八)成大菩提無上(九)涅槃無上(十)勝妙力無上である。

譬喩品では、七喩のうち第一の火宅喩、三平等のうち第一の乘平等が説かれる。乘平等については、「平有り」と簡略に記されるのみであるが、『法華論』巻下(大正二六・九頁上)には、乘平等の記述として「舍利弗・大迦葉等、衆所<sup>ニ</sup>知識、名号不<sup>レ</sup>同故、別与<sup>レ</sup>記。」とあり、舍利弗の受記(譬喩品)が挙げられている。

## 信解品

### §4 信解品

#### 【本文】

信解品。

有<sup>レ</sup>喩、無<sup>レ</sup>上。

第二窮子喩。為<sub>レ</sub>対<sub>下</sub>治求<sub>二</sub>声聞解脱<sub>一</sub>人、声聞一向決定増上慢心、説<sub>二</sub>窮子喩<sub>一</sub>。問。其増上慢心何也。

答。声聞一向決定増上慢心、自言<sub>下</sub>我乘与<sub>二</sub>如来乘<sub>一</sub>、等無<sub>中</sub>差別<sub>上</sub>。如<sub>レ</sub>是倒取。対<sub>二</sub>治此<sub>一</sub>故、為説<sub>二</sub>窮子譬喩<sub>一</sub>、応<sub>レ</sub>知。第二人者、以<sub>二</sub>三為<sub>レ</sub>一、令<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>大乘<sub>一</sub>故。

### 【校訂】

底本の「無有喩」を、「有喩」に改める。

### 【訓読】

信解品。

喩有り、上無し。

第二には窮子喩なり。声聞の解脱を求むる人の、声聞の一向決定増上慢心を対治せんが為に、窮子喩を説く。

問う。其の増上慢心とは何ぞや。

答う。声聞の一向決定増上慢心とは、自ら我乗と如来乗とは、等しく差別無しと言う。是の如く倒取す。此れを対治するが故に、為に窮子の譬喩を説くと、応に知るべし。第二の人には、三を一と為すを以て、

大乘に入らしむるが故なり。<sup>(88)</sup>

【註釈】

(88) 第二には窮子喩なり。く大乘に入らしむるが故なり 『法華論』卷下(大正二六・八頁中下)。

【解説】

信解品では、七喩のうち第二の窮子喩が説かれる。

薬草喩品

§5 薬草喩品

【本文】

薬草喩品。

無<sub>レ</sub>平、有<sub>レ</sub>上。

第三雲雨喩。為<sub>レ</sub>对<sub>二</sub>治大乘人、大乘一向決定増上慢心<sub>一</sub>故、説<sub>二</sub>雲雨喩<sub>一</sub>。問。其増上慢心何耶。

答。大乘一向決定増上慢心、如<sub>レ</sub>是意。無<sub>二</sub>別声聞・辟支仏乘、如<sub>レ</sub>是倒取。对<sub>二</sub>治此<sub>一</sub>故、為説<sub>二</sub>雲雨譬喩<sub>一</sub>、

応<sub>レ</sub>知。第三人者、令<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>種種乘<sub>一</sub>。諸仏如来、平等説法、随<sub>二</sub>諸衆生善根種子<sub>一</sub>、而生<sub>レ</sub>牙故。一者、示<sub>二</sub>現種子無上<sub>一</sub>故、説<sub>二</sub>雨譬喻<sub>一</sub>。「汝等所行、是菩薩道」者、謂發<sub>二</sub>菩提心<sub>一</sub>、退已還發者、前所<sub>レ</sub>修行善根、不滅。同後得<sub>レ</sub>果故。

### 【校訂】

底本の「一者上殘」を、伝全の頭註に従つて「一者」に改める。

### 【訓読】

菓草喩品。

平無く、上有り。

第三に雲雨喩なり。大乘人の、大乘の一向決定増上慢心を対治せんが為の故に、雲喩を説く。

問う。其の増上慢心とは何ぞや。

答う。大乘の一向決定増上慢心とは、是の如き意なり。別に声聞・辟支仏乘無しと、是の如く倒取す。此れを対治するが故に、為に雲雨の譬喩を説くと、応に知るべし。第三の人には、種種の乗を知らしむ。諸仏如来は、平等に説法して、諸の衆生の善根の種子に随いて、而も牙を生ずる故なり。<sup>(89)</sup>一には、種子無上を示現するが故に、雨の譬喩を説く。「汝等所行是菩薩道」とは、謂く菩提心を発し、退し已りて還た発



す者の、前に修行せる所の善根は、滅せず。同じく後に果を得るが故なり。<sup>(90)</sup>

【註釈】

(89) 第三に雲雨喩なり。く而も牙を生ずる故なり 『法華論』卷下(大正二六・八頁中下)。

(90) 一には、種子無上を示現するが故に、く同じく後に果を得るが故なり 『法華論』卷下(大正二六・九頁中)。

【解説】

葉草喩品では、七喩のうち第三の雲雨喩、十無上のうち第一の種子無上が説かれる。

受記品

§ 6 受記品

【本文】

受記品。

有<sub>レ</sub>平、無<sub>レ</sub>喩。

一者、信<sub>二</sub>種種乘異<sub>一</sub>、此品説<sub>二</sub>乘平等<sub>一</sub>也。

問。乗平等何也。

答。乗平等、謂与<sub>二</sub>声聞<sub>一</sub>、授<sub>三</sub>菩提記<sub>一</sub>。唯一大乘、無<sub>二</sub>乘<sub>一</sub>故。是乗平等、無<sub>二</sub>差別<sub>一</sub>故。

### 【訓読】

受記品。

平有り、喩無し。

一には、種種の乗の異なることを信ずるものに、此の品は乗平等を説くなり。

問う。乗平等とは何ぞや。

答う。乗平等とは、謂く声聞の与に、菩提の記を授く。唯だ一大乗のみありて、二乗無きが故なり。是れ

乗平等にして、差別無き故なり。<sup>(91)</sup>

### 【註釈】

(91) 一には、種種の乗の異なることを信ずるものに、<sub>一</sub>差別無き故なり 『法華論』卷下(大正二六・

八頁中)。

### 【解説】

受記品では、三平等のうち第一の乘平等が説かれる。『法華論』卷下（大正二六・九頁上）には乘平等の記述として「舍利弗・大迦葉等、衆所<sub>レ</sub>知識、名号不<sub>レ</sub>同故、別与<sub>レ</sub>記。」とあり、大迦葉等（受記品）の受記が挙げられている。

### 化城喩品

#### §7 化城喩品

##### 【本文】

化城喩品。

有<sub>レ</sub>喩、有<sub>レ</sub>上。

第四化城喩。為<sub>レ</sub>对<sub>二</sub>治有定人、実無謂<sub>レ</sub>有増上慢心、説<sub>二</sub>化城喩。

問。其増上慢心何耶。

答。実無謂<sub>レ</sub>有増上慢心、以下有<sub>二</sub>世間三昧・三摩跋提、実無<sub>中</sub>涅槃、生<sub>二</sub>涅槃想。如<sub>レ</sub>是倒取。对<sub>二</sub>治此<sub>一</sub>故、為説<sub>二</sub>化城譬喩、应<sub>レ</sub>知。第四人者、方便令<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>涅槃城<sub>一</sub>故。涅槃城者、所謂禪・三昧城故。過<sub>二</sub>彼城<sub>一</sub>已、然後令<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>大涅槃城<sub>一</sub>故。二者、示<sub>二</sub>現行無上<sub>一</sub>故、説<sub>二</sub>大通智勝如来本事等<sub>一</sub>。三者、示<sub>二</sub>現增長力無上<sub>一</sub>故、云<sub>二</sub>商主譬喩。

【訓読】

化城喩品。

喩有り、上有り。

第四には化城喩なり。有定の人の、実には無きも有りと謂う増上慢心を対治せんが為に、化城喩を説く。問う。其の増上慢心とは何ぞや。

答う。実には無きも有りと謂う増上慢心とは、世間の三昧・三摩跋提有りて、実には涅槃無きを以て、涅槃の想を生ず。是の如く倒取す。此れを対治するが故に、為に化城の譬喩を説くと、応に知るべし。第四の人には、方便もて涅槃の城に入らしむるが故なり。涅槃の城とは、所謂禪・三昧の城の故なり。彼の城を過ぎ已りて、然る後に大涅槃の城に入らしむるが故なり。<sup>(92)</sup> 二には、行無上を示現するが故に、大通智勝如来の本事等を説く。三には、増長力無上を示現するが故に、商主の譬喩を云う。<sup>(93)</sup>

【註釈】

(92) 第四には化城喩なり。↪然る後に大涅槃の城に入らしむるが故なり 『法華論』卷下(大正二六・八頁中下)。

(93) 二には、行無上を示現するが故に、↪商主の譬喩を云う 『法華論』卷下(大正二六・九頁中)。

【解説】

化城喩品では、七喩のうち第四の化城喩、十無上のうち第二の行無上と第三の増長力無上が説かれる。

五百弟子授記品

§ 8 五百弟子授記品

【本文】

五百弟子授記品。

有<sub>レ</sub>喩、有<sub>レ</sub>平、有<sub>レ</sub>上。

第五繫宝珠喩。為<sub>レ</sub>对<sub>二</sub>治無定人、散乱増上慢心、説<sub>二</sub>繫宝珠喩<sub>一</sub>。

問。其増上慢心何耶。

答。散乱増上慢心、実無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>定、過去雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>大乘善根<sub>一</sub>、而不<sub>二</sub>覚知<sub>一</sub>。不<sub>二</sub>覚知<sub>一</sub>故、不<sub>レ</sub>求<sub>二</sub>大乘<sub>一</sub>。狭劣心中、生<sub>二</sub>虚妄解<sub>一</sub>、謂<sub>二</sub>第一乘<sub>一</sub>。如<sub>レ</sub>是倒取。对<sub>二</sub>治此<sub>一</sub>故、為説<sub>二</sub>繫宝珠譬喩<sub>一</sub>、応<sub>レ</sub>知。四者、示<sub>二</sub>現令解無上<sub>一</sub>故、説<sub>二</sub>繫宝珠譬喩<sub>一</sub>。又説<sub>二</sub>第一乘平等<sub>一</sub>。謂<sub>二</sub>満子受記<sub>一</sub>、五百受記<sub>一</sub>。

【訓読】

五百弟子授記品。

喩有り、平有り、上有り。

第五には繫宝珠喩なり。無定人の、散乱の増上慢心を対治せんが為に、繫宝珠喩を説く。問う。其の増上慢心とは何ぞや。

答う。散乱の増上慢心とは、実には定有ること無く、過去に大乘の善根有りと雖も、而れども覺知せず。覺知せざるが故に、大乘を求めず。狭劣の心中に、虚妄の解を生じ、第一乗と謂う。是の如く倒取す。此れを対治するが故に、為に繫宝珠の譬喩を説くと、応に知るべし。<sup>(94)</sup> 四には、令解無上を示現するが故に、繫宝珠の譬喩を説く。<sup>(95)</sup> 又第一の乗平等を説く。満子の受記、五百の受記を謂う。<sup>(96)</sup>

### 【註釈】

(94) 第五には繫宝珠喩なり。く為に繫宝珠の譬喩を説くと、応に知るべし 『法華論』卷下（大正二六・八頁中）。

(95) 四には、解せしむる無上を示現するが故に、繫宝珠の譬喩を説く 『法華論』卷下（大正二六・九頁中）。

(96) 又第一の乗平等を説く。満子の受記、五百の受記を謂う 「満子」とは、すなわち、満慈子であり、富楼那弥多羅尼子のこと。『法華論』卷下（大正二六・九頁上）には、乗平等の記述として「富楼那等、五百人・千二百等、同一名故、俱時与<sub>レ</sub>記。」とあり、富楼那等の受記（五百弟子授記品）が

挙げられている。

【解説】

五百弟子授記品では、七喩のうち第五の繫珠喩、十無上のうち第四の令解無上、三平等のうち第一の乗平等が説かれる。

受学無学人記品

§ 9 受学無学人記品

【本文】

受学無学人記品。

有<sub>レ</sub>平、無<sub>レ</sub>喩。

説「第一乗平等」謂「阿難受記、羅云受記、学・無学二千受記。」

【訓読】

受学無学人記品。

平有り、喩無し。

第一の乗平等を説く。阿難の受記、羅云の受記、学・無学二千の受記を謂う。<sup>(97)</sup>

【註釈】

(97) 第一の乗平等を説く。阿難の受記、羅云の受記、学・無学二千の受記を謂う 『法華論』卷下（大正二六・九頁上）には、乗平等の記述として「学・無学等、皆同一号、又復非<sub>三</sub>是衆所<sub>一</sub>知識<sub>一</sub>故、同与<sub>レ</sub>記。」とあり、阿難と羅睺羅、学・無学の二千人の受記が説かれる受学無学人記品が挙げられている。

【解説】

受学無学人記品では、三平等のうち第一の乗平等が説かれる。

法師品

§ 10 法師品

【本文】

法師品。

有<sub>レ</sub>平、無<sub>レ</sub>喻、有<sub>レ</sub>上。



説<sup>二</sup>第一乗平等<sup>一</sup>。謂<sup>四</sup>惣記<sup>三</sup>一切成<sup>二</sup>仏道<sup>一</sup>。

【訓読】

法師品。

平有り、喩無く、上有り。

第一の乗平等を説く。惣じて一切の仏道を成ずることを記するを謂<sup>(98)</sup>う。

【註釈】

(98) 第一の乗平等を説く。惣じて一切の仏道を成ずることを記するを謂う 『法華論』卷下(大正二

六・九頁上)に説かれる、乗平等を示す六所における授記には、法師品についての記述はないが、

法師品が、『法華経』を受持読誦等する一切への授記を説く内容であることから、乗平等を説くと

されている。また、『法華玄贊』卷五本(大正三四・七三四頁中)にも、「三平等有<sup>二</sup>九品<sup>一</sup>。一譬

喩・二授記・三五百弟子授記・四授学無学人記・五法師品・六持品・七提婆達多品・八常不軽・九

見宝塔。初之八品、皆有<sup>二</sup>授記<sup>一</sup>、説<sup>二</sup>初乗平等<sup>一</sup>。後見宝塔中、合説<sup>二</sup>生死涅槃法及身二種平等<sup>一</sup>。」とあ

り、法師品には乗平等が説かれると規定されている。

## 【解説】

法師品では、三平等のうち第一の乘平等が説かれる。また、「上有り」という記述について、法師品は、十無上のうち第十の勝妙力無上にあたる。『法華論』卷下（大正二六・九頁上）には、「十者、示<sub>二</sub>現勝妙力無上<sub>一</sub>故、自余經文示現、応<sub>レ</sub>知。……持力者、有<sub>二</sub>三法門<sub>一</sub>、示<sub>二</sub>現持力<sub>一</sub>。如<sub>二</sub>法師品・安樂行品・勸持品等広説<sub>一</sub>。」とあり、勝妙力無上に撰められている持力に法師品が該当するためである。§ 17 分別功德品の解説を参照。

## 見宝塔品

### § 11 見宝塔品

#### 【本文】

見宝塔品。

有<sub>レ</sub>平、無<sub>レ</sub>喻、有<sub>レ</sub>上。

五者、示<sub>二</sub>現清淨国土無上<sub>一</sub>故、示<sub>二</sub>現多宝如来塔<sub>一</sub>。多宝如来塔、示<sub>二</sub>現一切仏土清淨<sub>一</sub>者、示<sub>二</sub>現諸仏実相境界中、種種諸宝間錯莊嚴<sub>一</sub>故。示現有<sub>レ</sub>八。一者塔、二者量、三者略、四者住持、五者示現無量仏、六者離穢、七者多宝、八者同一塔坐。塔者、現<sub>二</sub>如来舍利住持<sub>一</sub>故。量者、方便示<sub>二</sub>現一切仏土清淨莊嚴、是出世間清淨無漏善根所<sub>レ</sub>生、非<sub>二</sub>是世間有漏善根之所<sub>レ</sub>生也。略者、示<sub>二</sub>現多宝仏身一体、撰<sub>二</sub>取一切諸仏真

法身<sub>一</sub>故。住持者、示<sub>二</sub>現諸仏如来法身自在力<sub>一</sub>故。示現無量仏者、示<sub>二</sub>現彼此所作諸業、無差別<sub>一</sub>故。遠離穢者、示<sub>二</sub>現一切諸仏国土、平等清淨<sub>一</sub>故。多宝者、示<sub>二</sub>現一切諸仏国土、同宝性<sub>一</sub>故。同一塔坐者、示<sub>下</sub>現化仏、非<sub>二</sub>化仏<sub>一</sub>法仏・報仏等、皆為<sub>中</sub>成大事<sub>上</sub>故。第二世間涅槃平等。以下多宝如来入<sub>二</sub>於涅槃<sub>一</sub>、世間涅槃彼此、平等無差別<sub>上</sub>故。第三者身平等。多宝如来、已入<sub>二</sub>涅槃<sub>一</sub>、復示<sub>二</sub>現自身・佗身法身、平等無差別<sub>一</sub>故。如<sub>レ</sub>是二種無煩惱人、染慢之心、見<sub>二</sub>彼此身所作差別、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>彼此仏性身悉平等<sub>一</sub>故。謂<sub>下</sub>即此人、我証<sub>二</sub>此法<sub>一</sub>故、彼人不<sub>レ</sub>得。此対治故、与<sub>二</sub>諸声聞<sub>一</sub>授記、応<sub>レ</sub>知。

【訓読】

見宝塔品。

平有り、喩無く、上有り。

五には、清淨国土無上を示現するが故に、多宝如来の塔を示現す。多宝如来の塔もて、一切仏土の清淨を示現すとは、諸仏の実相の境界の中に、種種の諸宝の間錯せる莊嚴を示現するが故なり。示現に八有り。一には塔、二には量、三には略、四には住持、五には示現無量仏、六には離穢、七には多宝、八には同一塔坐。塔とは、如来の舍利の住持することを現するが故なり。量とは、方便もて一切の仏土の清淨莊嚴なるは、是れ世間の清淨なる無漏の善根より生ずる所にして、是れ世間の有漏の善根より生ずる所に非ざるを示現するなり。略とは、多宝仏の身は一体にして、一切諸仏の眞法身を撰取るを示現するが故なり。

住持とは、諸仏如来の法身の自在力を示現するが故なり。示現無量仏とは、彼此の所作の諸業の、無差別なるを示現するが故なり。遠離穢とは、一切諸仏の国土の、平等清浄なるを示現するが故なり。多宝とは、一切諸仏の国土の、同じく宝性なるを示現するが故なり。同一塔坐とは、化仏と、化仏に非ざる法仏・報仏等と、皆大事を為成すを示現するが故なり。<sup>(99)</sup> 第二には世間涅槃平等なり。多宝如来の涅槃に入るは、世間と涅槃との彼此の、平等無差別なるを以ての故なり。第三には身平等なり。多宝如来の、已に涅槃に入りて、復た自身・佗身の法身の、平等無差別なるを示現するが故なり。是の如き二種の無煩惱の人は、染慢の心もて、彼此の身の所作の差別を見、彼此の仏性の身の悉く平等なるを知らざるが故なり。即ち此の人は、我れ此の法を証するが故に、彼の人は得ずと謂う。此れは対治の故に、諸の声聞の与に授記すと、<sup>(100)</sup> 応に知るべし。

【註釈】

(99) 五には、清浄国土無上を示現するが故に、<sup>(99)</sup> 皆大事を為成すを示現するが故なり 『法華論』卷下  
(大正二六・九頁中下)。

(100) 第二には世間涅槃平等なり。諸の声聞の与に授記すと、<sup>(100)</sup> 応に知るべし 『法華論』卷下 (大正二六・八頁下)。

【解説】

見宝塔品では、十無上のうち第五の清淨国土無上、三平等のうち第二の世間涅槃平等と第三の身平等が説かれる。「是の如き、一種の無煩惱の人」は、『法華論』中では、乘平等も含めた「三種」と記述される。

提婆達多品

§ 12 提婆達多品

【本文】

提婆達多品。

有<sup>レ</sup>平、無<sup>レ</sup>喩。

此品説<sup>二</sup>乘平等<sup>一</sup>。謂<sup>三</sup>提婆達多、受<sup>二</sup>天王如来記<sup>一</sup>也。

【校訂】

底本の「授天王如来記」を、伝全の頭註に従って「受天王如来記」に改める。

【訓読】

提婆達多品。

平有り、喩無し。

此の品には乗平等を説く。提婆達多の、天王如来の記を受くるを謂うなり。<sup>(101)</sup>

【註釈】

(101) 此の品には乗平等を説く。提婆達多の、天王如来の記を受くるを謂うなり 『法華論』卷下（大正二六・九頁上）には、乗平等の記述として「如来、与<sub>二</sub>彼提婆達多<sub>一</sub>、授<sub>二</sub>別記<sub>一</sub>者、示<sub>三</sub>現如来無<sub>二</sub>怨惡<sub>一</sub>故。」とあり、提婆達多の受記（提婆達多品）が挙げられている。

【解説】

提婆達多品では、三平等のうち第一の乗平等が説かれる。

勸持品

§ 13 勸持品

【本文】

勸持品。

有<sub>レ</sub>平、無<sub>レ</sub>喩、有<sub>二</sub>無上<sub>一</sub>。

此品説<sub>二</sub>乘平等<sub>一</sub>。謂<sub>三</sub>橋曇并耶輸、受<sub>二</sub>仏記<sub>一</sub>也。

【訓読】

勸持品。

平有り、喩無く、無上有り。

此品には乘平等を説く。橋曇並びに耶輸の、仏記を受くるを謂うなり。<sup>(102)</sup>

【註釈】

(102) 此品には乘平等を説く。橋曇並びに耶輸の、仏記を受くるを謂うなり 『法華論』卷下（大正二

六・九頁上）には、乘平等の記述として「与<sub>二</sub>比丘尼及諸天女<sub>一</sub>、授<sub>二</sub>仏記<sub>一</sub>者、示<sub>下</sub>現女人在家・出家、修<sub>二</sub>菩薩行<sub>一</sub>、皆証<sub>中</sub>仏果<sub>上</sub>故、与<sub>二</sub>授記<sub>一</sub>。」とあり、橋曇弥・耶輸陀羅等の女人の受記（勸持品）が挙げられている。

【解説】

勸持品では、三平等のうち第一の乘平等が説かれる。また、「無上有り」という記述について、勸持品は、十無上のうち第十の勝妙力無上にあたる。『法華論』卷下（大正二六・九頁上）には、「十者、示<sub>二</sub>現

勝妙力無上<sup>一</sup>故、自余經文示現、応<sup>レ</sup>知。……持力者、有<sup>二</sup>法門<sup>一</sup>、示<sup>二</sup>現持力<sup>一</sup>。如<sup>二</sup>法師品・安樂行品・勸持品等広説<sup>一</sup>。」とあり、勝妙力無上に摂められている持力に勸持品が該当するためである。§ 17 分別功德品の解説を参照。

## 安樂行品

### § 14 安樂行品

#### 【本文】

安樂行品。

無<sup>レ</sup>平、有<sup>レ</sup>喩、有<sup>レ</sup>上。

第六明珠喩。為<sup>レ</sup>对<sup>下</sup>治集<sup>二</sup>功德<sup>一</sup>人、実有<sup>二</sup>功德<sup>一</sup>増上慢心<sup>上</sup>、説<sup>二</sup>明珠喩<sup>一</sup>。問。其増上慢心何也。

答。実有<sup>二</sup>功德<sup>一</sup>増上慢心、聞<sup>二</sup>大法<sup>一</sup>、取<sup>二</sup>非大乘<sup>一</sup>。如<sup>レ</sup>是倒取。对<sup>下</sup>治此<sup>一</sup>故、為説<sup>下</sup>輪王解<sup>二</sup>自髻中明珠<sup>一</sup>、与<sup>レ</sup>之譬喩<sup>上</sup>、応<sup>レ</sup>知。第六人者、説<sup>二</sup>大乘法<sup>一</sup>。以<sup>四</sup>此法門<sup>一</sup>、同<sup>三</sup>十地行滿<sup>一</sup>、諸仏如来、密与<sup>二</sup>授記<sup>一</sup>故。六者、示<sup>二</sup>現説無上<sup>一</sup>故、説<sup>下</sup>解<sup>二</sup>髻中明珠<sup>一</sup>譬喩<sup>上</sup>。

#### 【訓読】



安樂行品。

平無く、喩有り、上有り。

第六には明珠喩なり。功德を集むる人の、実には功德有る増上慢心を対治せんが為に、明珠喩を説く。問う。其の増上慢心とは何ぞや。

答う。実には功德有る増上慢心とは、大法を聞くも、非大乘を取る。是の如く倒取す。此れを対治する故に、為に輪王の自らの髻中の明珠を解き、之を与える譬喩を説くと、応に知るべし。第六人には、大乘の法を説く。以此の法門は、同十地行滿に、諸仏如来の、密かに授記を与えるに同じきを以ての故なり。<sup>103</sup>六には、説無上を示現するが故に、髻中の明珠を解く譬喩を説く。<sup>104</sup>

【註釈】

(103) 第六には明珠喩なり。密かに授記を与えるに同じきを以ての故なり 『法華論』卷下（大正二

六・八頁中下）。

(104) 六には、説無上を示現するが故に、解髻中明珠の譬喩を説く 『法華論』卷下（大正二六・九頁中）。

## 【解説】

安樂行品では、七喩のうち第六の明珠喩、十無上のうち第六の説無上が説かれる。また、安樂行品は、第十の勝妙力無上にも該当する。『法華論』巻下（大正二六・九頁上）には、「十者、示<sub>二</sub>現勝妙力無上<sub>一</sub>故、自余經文示現、応<sub>レ</sub>知。…：持力者、有<sub>二</sub>三法門<sub>一</sub>、示<sub>二</sub>現持力<sub>一</sub>。如<sub>二</sub>法師品・安樂行品・勸持品等広説<sub>一</sub>。」とあり、勝妙力無上に撰められている持力に安樂行品が該当するためである。§ 17 分別功德品の解説を参照。

## 従地踊出品

### § 15 従地踊出品

#### 【本文】

踊出品。

無<sub>レ</sub>喩、有<sub>レ</sub>平、有<sub>レ</sub>上。

七者、示<sub>二</sub>現教化衆生無上<sub>一</sub>故、地中踊<sub>二</sub>出無量菩薩摩訶薩等<sub>一</sub>。

【訓読】

踊出品。

喩無く、平有り、上有り。

七には、教化衆生無上を示現するが故に、地中より無量の菩薩摩訶薩等を踊出す。<sup>(105)</sup>

【註釈】

(105) 七には、教化衆生無上を示現するが故に、地中より無量の菩薩摩訶薩等を踊出す 『法華論』卷下

(大正二六・九頁中)。

【解説】

(従地) 踊出品では、十無上のうち第七の教化衆生無上が説かれる。なお、「平有り」という記述について、『法華論』の三平等の規定から外れているため、踊出品がどの平等に当たるかは不明である。

如来寿量品

§ 16 如来寿量品

【本文】

如來壽量品。

無<sub>レ</sub>平、有<sub>レ</sub>上。

第七醫師喻。為<sub>レ</sub>對<sub>下</sub>治不<sub>レ</sub>集<sub>二</sub>功德<sub>一</sub>人、實無<sub>二</sub>功德<sub>一</sub>。增上慢心、說<sub>二</sub>醫師喻<sub>一</sub>。

問。其增上慢心何也。

答。根未<sub>二</sub>淳熟<sub>一</sub>、為<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>熟故、如<sub>レ</sub>是<sub>二</sub>示<sub>二</sub>現涅槃量<sub>一</sub>。八者、示<sub>二</sub>現成大菩提無上<sub>一</sub>故、示<sub>二</sub>現三種仏菩提<sub>一</sub>故。

一者、示<sub>二</sub>現応仏菩提<sub>一</sub>。隨<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>応<sub>レ</sub>見、而為<sub>レ</sub>示現。如<sub>レ</sub>經「皆謂如來、出釈氏宮、去伽耶城不遠、坐於道場、得成阿耨多羅三藐三菩提」故。二者、示<sub>二</sub>現報仏菩提<sub>一</sub>。十地行滿足、得<sub>二</sub>常涅槃証<sub>一</sub>故。如<sub>レ</sub>經「善男子、我實成仏已來、無量無辺百千萬億那由佗劫」故。三者、示<sub>二</sub>現法仏菩提<sub>一</sub>。謂如來藏、性淨涅槃。常恒・清涼・不變等義。如<sub>レ</sub>經「如來、如實知見三界之相」、次第乃至、「不如三界、見於三界」故。三界相者、謂衆生界、即涅槃界。不<sub>レ</sub>離<sub>二</sub>衆生界<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>如來藏<sub>一</sub>故。「無有生退若出」者、謂常恒・清淨・不變義故。「亦無在世及滅度」者、謂如來藏真如之體、不<sub>レ</sub>即<sub>二</sub>衆生界<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>離<sub>二</sub>衆生界<sub>一</sub>故。「非實非虛、非如非異」者、謂離<sub>二</sub>四種相<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>四種<sub>一</sub>者、是無常故。「不如三界、見於三界」者、謂仏如來、能<sub>レ</sub>見能<sub>レ</sub>証真如法。法身、凡夫不<sub>レ</sub>見故。經言「如來明見、無有錯謬」故。「我本行菩薩道、今猶未滿」者、以<sub>二</sub>本願<sub>一</sub>故。衆生界未<sub>レ</sub>盡、願非<sub>二</sub>究竟<sub>一</sub>故。言<sub>二</sub>未滿<sub>一</sub>、非<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>菩提不<sub>二</sub>滿足<sub>一</sub>也。「所成壽命、復倍上數」者、此文示<sub>二</sub>現如來常命<sub>一</sub>。善巧方便、顯<sub>二</sub>多數<sub>一</sub>故。過<sub>二</sub>上數量<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>數知<sub>一</sub>。「我淨土不毀、而衆見燒盡」者、報仏如來真実淨土、第一義諦之所<sub>レ</sub>攝故。九者、示<sub>二</sub>現涅槃無上<sub>一</sub>故、說<sub>二</sub>醫師譬喻<sub>一</sub>。

【訓読】

如来寿量品。

平無く、上有り。

第七には医師喩なり。功德を集めざる人の、実には功德無き増上慢心を対治せんが為に、医師喩を説く。問う。其の増上慢心とは何ぞや。

答う。根の未だ淳熟せざるを、熟せしむる為の故に、是の如く涅槃の量を示現す。<sup>106</sup>八には、成大菩提無上を示現するが故に、三種の仏菩提を示現する故なり。一には、応仏の菩提を示現す。応に見るべき所に随いて、而も為に示現す。經に「皆謂如来、出釈氏宮、去伽耶城不遠、坐於道場、得成阿耨多羅三藐三菩提」とあるが故の如し。二には、報仏の菩提を示現す。十地の行満足して、常涅槃の証を得るが故なり。經に「善男子、我実成仏已来、無量無辺百千万億那由佗劫」とあるが故の如し。三には、法仏の菩提を示現す。謂く如来蔵とは、性淨涅槃なり。常恒・清涼・不変等の義なり。經に「如来、如実知見三界之相」より、次第して乃至、「不如三界、見於三界」とあるが故の如し。三界相とは、謂く衆生界は、即ち涅槃界なり。衆生界を離れずして、如来蔵有るが故なり。「無有生若退若出」とは、謂く常恒・清淨・不変の義なるが故なり。「亦無在世及滅度」とは、謂く如来蔵真如の体は、衆生界に即せずして、衆生界を離れざるが故なり。「非実非虚、非如非異」とは、謂く四種の相を離る。四種有りとは、是れ無常なるが故

なり。「不如三界、見於三界」者、謂く仏如来は、真如法・法身を能見し能証するも、凡夫は見ざるが故なり。經に「如来明見、無有錯謬」と言うが故なり。「我本行菩薩道、今猶未滿」とは、本願を以ての故なり。衆生界の未だ尽きざれば、願は究竟するに非ざるが故なり。未滿と言うは、菩提の満足せざるを謂うに非ざるなり。「所成壽命、復倍上數」とは、此の文は如来の常なる命を示現す。善巧方便もて、多數を顯すが故なり。上の數量を過ぎて、數え知るべからず。「我淨土不毀、而衆見燒尽」とは、報仏如来の眞実淨土は、第一義諦の撰むる所なるが故なり。九には、涅槃無上を示現するが故に、醫師の譬喩を説く。<sup>197)</sup>

【註釈】

(106) 第七には醫師喩なり。く是の如く涅槃の量を示現す 『法華論』卷下(大正二六・八頁中下)。

(107) 八には、成大菩提無上を示現するが故に、く醫師の譬喩を説く 『法華論』卷下(大正二六・九頁中下)。

【解説】

如来壽量品では、七喩のうち第七の醫師喩、十無上のうち第八の成大菩提無上、第九の涅槃無上が説かれる。

分別功德品

§ 17 分別功德品

【本文】

分別功德品。

分別与<sub>レ</sub>随喜、為<sub>レ</sub>弥勒品。無<sub>レ</sub>喻、無<sub>レ</sub>平、有<sub>レ</sub>上。

法力者、五門示現。一者証門、二者信門、三者供養門、四者聞法門、五者誦誦持說門。如<sub>レ</sub>經「我説是如来、壽命長遠時、六百八十万億那由佗恒河沙等衆生、得無生法忍」者、所謂初地証智、応<sub>レ</sub>知。「八生」乃至「一生得阿耨多羅三藐三菩提」、謂証<sub>レ</sub>初地菩提法<sub>一</sub>故。八生・一生者、謂諸凡夫、決定能証<sub>レ</sub>初地<sub>一</sub>故。隨<sub>レ</sub>力隨<sub>レ</sub>分、八生乃至一生、皆証<sub>レ</sub>初地<sub>一</sub>故。此言<sub>レ</sub>「阿耨多羅三藐三菩提」者、以下離<sub>レ</sub>三界分段生死、隨<sub>レ</sub>分能見<sub>中</sub>真如法性、名<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>菩提。非<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>究竟滿<sub>レ</sub>足如来方便涅槃<sub>一</sub>也。二者信門。如<sub>レ</sub>經「復有八世界微塵數衆生。皆發阿耨多羅三藐三菩提心」故。三供養門。如<sub>レ</sub>經「是諸菩薩摩訶薩、得大法利時、於虛空中、雨曼陀羅華<sub>一</sub>」、如<sub>レ</sub>是等故。

【校訂】

底本の「一者法門」を、『法華論』に従つて「一者証門」に改める。

【訓読】

分別功德品。

分別と隨喜とは、彌勒品と為す。喩無く、平無く、上有り。

法力とは、五門もて示現す。一には証門、二には信門、三には供養門、四には聞法門、五には誦誦持説門なり。經の「我説是如來、壽命長遠時、六百八十万億那由佗恒河沙等衆生、得無生法忍」の如きは、所謂初地の証智なりと、応に知るべし。「八生」より乃至「一生得阿耨多羅三藐三菩提」までは、謂く初地の菩提法を証する故なり。八生・一生とは、謂く諸の凡夫の、決定して能く初地を証するが故なり。力に隨い分に隨い、八生乃至一生に、皆初地を証する故なり。此に「阿耨多羅三藐三菩提」と言うは、三界の分段生死を離れ、分に隨い能く真如法性を見るを以て、菩提を得と名づく。究竟して如來の方便涅槃を満足すと謂うに非ざるなり。二には信門なり。經に「復有八世界微塵數衆生。皆發阿耨多羅三藐三菩提心」とあるが故の如し。三には供養門なり。經に「是諸菩薩摩訶薩、得大法利時、於虛空中、雨曼陀羅華」とあるが如きは、是の如き等の故なり。<sup>108)</sup>

【註釈】

(108) 法力とは、五門もて示現す。是の如き等の故なり 『法華論』卷下(大正二六・九頁下)一〇頁(上)。



【解説】

『法華論』では、分別功德品以降の諸品に、法力・持力・修行力が説かれる。まず、法力について『法華論』巻下（大正二六・九頁下）には、「法力者、五門示現。一者証門、二者信門、三者供養門、四者聞法門、五者読誦持説門。弥勒菩薩品中、示<sub>二</sub>現四門。常精進菩薩品中、示<sub>二</sub>現一門。」とあり、証門・信門・供養門・聞法門・読誦持説門の五種の法力が、弥勒菩薩品と常精進菩薩品に示されることが説かれる。「弥勒菩薩品」とは、分別功德品・随喜功德品を指し、「常精進菩薩品」とは、法師功德品を指す。そして、分別功德品では、第一の証門、第二の信門、第三の供養門の三つの法力が説かれる。これらのことは、『法華文句』巻一〇上（大正三四・一三六頁上）にも解説されている。

『法華論科文』中に「上有り」と記されるのは、分別功德品以下の諸品が、十無上のうち第十の勝妙力無上に該当するためである。ここには、法力・持力・修行力が勝妙力無上の所撰であるという前提が存する。この前提は、勝妙力無上についての「十者、示<sub>二</sub>現勝妙力無上<sub>一</sub>故、自余經文示現、応<sub>レ</sub>知。」（大正二六・九頁下）という記述に拠る。「自余」とは、第九の涅槃無上が説かれる如来寿量品の「自余」、すなわち分別功德品以降の諸品を指すのであり、そこに説かれる法力・持力・修行力は当然、勝妙力無上の所撰と考えられるのである。吉蔵撰『法華論疏』巻下（大正四〇・八二三頁中）の「自此已下、示<sub>二</sub>現法力・持力・修行力<sub>一</sub>。此第三料<sub>二</sub>簡多宝塔<sub>一</sub>竟、還復宗釈<sub>二</sub>前勝妙力無上<sub>一</sub>。」という記述にも、法力・持力・

修行力が勝妙力無上の所摂であるという前提を見ることができ、これに関して、『法華玄贊』卷五本（大正三四・七三四頁下）には、以下のようにある。

余残修多羅、是第十無上。謂余十四品、並是第十無上。於中、有二力。一法力、二修行力。法力有三品。一分別功德、二隨喜功德、三法師功德。修行力中、復有七力。合十一品。一持力有三品。一法師、二安樂行、三勸持。二說力有一品。謂神力。三行苦行力、亦一品。謂藥王品。四教化衆生行苦行力、亦一品。謂妙音。五護衆生諸難力有三品。一觀音普門、二陀羅尼。六功德勝力有一品。謂妙莊嚴王本事。七護法力有二品。一普賢、二囑累。

後十無上、是初七喻・三平等殘、名為「上殘」。故本論中、解「七喻・三平等」已云、「余残修多羅、明無上義」。第十無上、是前九種無上之殘、名為「下殘」。故本論中、解「第十無上」云、「十者勝妙力無上。余残修多羅說」。残有「二義」。一者文殘。曾未說故。二者義殘。前雖「已說」、義猶未「尽」。

すなわち、第十の勝妙力無上には、法力と修行力の二種があり、分別功德品以下に説かれるという。これは、『法華文句記』卷九下（大正三四・三三二頁中）でも「十勝妙力無上、指「下諸品」、為「余残修多羅」。當「知」、論意指「分別品去」、為「余残修多羅。」と述べられているほか、『法華玄贊』以前に成立したとされる『法華經疏』（大正八五・一八一頁下〜一八二頁上）にも、見ることが出来る。『法華經疏』については、「金二〇一二」、「平井一九九一」参照。ただし、『法華玄贊』が、修行力のなかに持力を摂め、教化衆生行苦行力を加えて七力とするのは、独特な解釈であり、注意が必要である。また、余談ではあるが、

§5 薬草喩品の校訂の「上残」とは、『法華玄贊』に記されている通り、七喩・三平等の残りという意味であり、十無上を指している。さらに、「文残」・「義残」といった語彙は、『守護国界章』卷中之下（伝全二・四七三頁）で、最澄によって用いられ、「文科」・「義科」という語彙とともに、当該の議論で重要な役割を担っている。

また、『法華論科文』には、持力に関する直接的な言及はないが、『法華論』卷下（大正二六・九頁上）には、持力は法師品・安樂行品・勸持品に示されるといふ記述を反映して、これらの三品には、勝妙力無上が充てられている。§10 法師品、§13 勸持品、§14 安樂行品の解説を参照。

### 随喜功德品

#### §18 随喜功德品

##### 【本文】

随喜功德品。

無<sub>レ</sub>喩、無<sub>レ</sub>平、有<sub>レ</sub>上。

四聞法門。如<sub>二</sub>随喜品所<sub>レ</sub>説、応<sub>レ</sub>知。

##### 【訓読】

随喜功德品。

喩無く、平無く、上有り。

四には聞法門なり。随喜品に説く所の如しと、応に知るべし。<sup>(109)</sup>

【註釈】

(109) 四には聞法門なり。随喜品に説く所の如しと、応に知るべし 『法華論』卷下（大正二六・一〇頁上）。

【解説】

随喜功德品では、十無上のうち第十の勝妙力無上、法力のうち第四の聞法門が説かれる。

法師功德品

§ 19 法師功德品

【本文】

法師功德品。

無<sub>レ</sub>喩、無<sub>レ</sub>平、有<sub>レ</sub>上。

常精進菩薩品中一法門者、謂誦誦・解説・書写等、得<sub>二</sub>六根清淨<sub>一</sub>。如<sub>二</sub>經<sub>一</sub>「若善男子、善女人、受持法華經、若誦、若誦、若誦、若書写、是人当得八百眼功德」、次第乃至、「得千二百億功德」故。此得<sub>二</sub>六根清淨<sub>一</sub>者、謂諸凡夫、以<sub>二</sub>經力<sub>一</sub>故、得<sub>二</sub>勝根用<sub>一</sub>。未<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>初地菩薩正位<sub>一</sub>。此義<sub>レ</sub>知。如<sub>二</sub>經<sub>一</sub>「以父母所生清淨肉眼、見于三千大千世界」、如<sub>レ</sub>是等故。又六根清淨者、於<sub>二</sub>一<sub>一</sub>根中、悉能具<sub>二</sub>足見<sub>レ</sub>色、聞<sub>レ</sub>声、弁<sub>二</sub>香<sub>一</sub>味、覺<sub>レ</sub>触、知<sub>レ</sub>法、諸根互用。此義<sub>レ</sub>知。眼所<sub>レ</sub>見者、聞<sub>レ</sub>香能知。如<sub>二</sub>經<sub>一</sub>「釈提桓因、在勝殿上、五欲娛樂」、乃至「説法」故。聞<sub>レ</sub>香知者、此是知<sub>レ</sub>境。以<sub>二</sub>鼻根知<sub>一</sub>。

### 【訓読】

法師功德品。

喩無く、平無く、上有り。

常精進菩薩品の中の一法門とは、謂く誦誦・解説・書写等もて、六根清淨を得。經の「若善男子、善女人、受持法華經、若誦、若誦、若誦、若書写、是人当得八百眼功德」より、次第して乃至、「得千二百億功德」とあるが故の如し。此の六根清淨を得とは、謂く諸の凡夫、經力を以ての故に、勝根の用を得。未だ初地の菩薩の正位に入らず。此の義<sub>レ</sub>知。如<sub>二</sub>經<sub>一</sub>「以父母所生清淨肉眼、見于三千大千世界」、是の如き等の故の如し。又六根清淨とは、一一の根中に於いて、悉く能く色を見、声を聞き、香味を弁じ、触を覺し、法を知り、諸根の互用を具足す。此の義<sub>レ</sub>知。如<sub>二</sub>經<sub>一</sub>「以父母所生清淨肉眼、見于三千大千世界」、是の如き等の故の如し。又六根清淨とは、一一の根中に於いて、悉く能く色を見、声を聞き、香味を弁じ、触を覺し、法を知り、諸根の互用を具足す。此の義<sub>レ</sub>知。如<sub>二</sub>經<sub>一</sub>「以父母所生清淨肉眼、見于三千大千世界」、是の如き等の故の如し。

經の「釈提桓因、在勝殿上、五欲娛樂」より、乃至「說法」までの故の如し。香を聞きて知るとは、此れは是れ知の境なり。鼻根を以て知る。<sup>(1)</sup>

【註釈】

(110) 常精進菩薩品の中の一法門とは、鼻根を以て知る 『法華論』卷下（大正二六・一〇頁上）。

【解説】

法師功德品では、十無上のうち第十の勝妙力無上、法力のうち第五の誦誦持説門が説かれる。

常不輕菩薩品

§ 20 常不輕菩薩品

【本文】

常不輕菩薩品。

有<sub>レ</sub>平、無<sub>レ</sub>喻、無<sub>レ</sub>上。

菩薩記者、如<sub>二</sub>下不輕菩薩品中示現<sub>一</sub>、応<sub>レ</sub>知。礼拝讚歎、作<sub>二</sub>如<sub>レ</sub>是言<sub>一</sub>。「我不輕汝等。皆当得作仏」者、示<sub>三</sub>現衆生皆有<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>故。言<sub>二</sub>声聞人得<sub>レ</sub>授者、声聞有<sub>二</sub>四種<sub>一</sub>。一者決定声聞、二者増上慢声聞、三者退發

菩提心声聞、四者応化声聞。二種声聞、如来授記。謂応化者、退已還發菩提心者。若決定者、増上慢者、二種声聞、根未熟故、不与授記。菩薩与授記者、方便令發菩提心故。

【訓読】

常不輕菩薩品。

平有り、喩無く、上無し。

菩薩の記とは、下の不輕菩薩品の中に示現するが如く、応に知るべし。礼拝讚歎し、是の如き言を作す。「我不輕汝等。皆当得作仏」とは、衆生に皆仏性有ることを示現するが故なり。声聞人に授くることを得と言うは、声聞に四種有り。一には決定声聞、二には増上慢声聞、三には退發菩提心声聞、四には応化声聞なり。二種の声聞には、如来授記す。謂く応化の者と、退し已りて還た菩提心を發す者なり。若しは決定の者と、増上慢の者の、二種の声聞は、根の未だ熟せざるが故に、授記を与えず。菩薩の授記を与うるは、方便もて菩提心を發さしむるが故なり。<sup>(11)</sup>

【註釈】

(11) 菩薩の記とは、方便もて菩提心を發さしむるが故なり 『法華論』卷下(大正二六・九頁上)には、乘平等の記述として、常不輕菩薩による授記(常不輕菩薩品)が挙げられている。

【解説】

常不輕菩薩品では、三平等のうち第一の乘平等が説かれる。

如来神力品

§ 21 如来神力品

【本文】

神力品。

無<sub>レ</sub>喩、無<sub>レ</sub>平、有<sub>レ</sub>上。

修行力者、五門示現。一者説力、二者行苦行力、三者護衆生諸難力、四者功德勝力、五者護法力。説力者、為<sub>二</sub>三法門<sub>一</sub>、神力品示現。一者出<sub>二</sub>広長舌<sub>一</sub>。令<sub>二</sub>憶念<sub>一</sub>故。二者謂磬咳声説<sub>レ</sub>偈。令<sub>レ</sub>聞故。令<sub>二</sub>聞<sub>レ</sub>声已、如実修行、不<sub>二</sub>放逸<sub>一</sub>故。三者彈指覺<sub>二</sub>悟衆生<sub>一</sub>。令<sub>二</sub>修行者得<sub>二</sub>覺悟<sub>一</sub>故。

【訓読】

神力品。

喩無く、平無く、上有り。



修行力とは、五門もて示現す。一には説力、二には行苦行力、三には護衆生諸難力、四には功德勝力、五には護法力。説力とは、三法門を為して、神力品に示現す。一には広長舌を出す。憶念せしめんが故なり。二には謂く磬咳声もて偈を説く。聞かしめんが故なり。声を聞き已りて、如実に修行して、放逸ならざしめんが故なり。三には弾指して衆生を覚悟す。修行者をして覚悟を得しめんが故なり。<sup>(112)</sup>

【註釈】

(112) 修行力とは、五門もて示現す。修行者をして覚悟を得しめんが故なり 『法華論』卷下（大正二

六・一〇頁上中）。

【解説】

（如来）神力品以降の各品では、説力・行苦行力・護衆生諸難力・功德勝力・護法力の五つの修行力が説かれる。（如来）神力品では、十無上のうち第十の勝妙力無上、修行力のうち第一の説力が説かれる。

嘱累品

§ 22 嘱累品

【本文】

嘱累品。

無<sup>レ</sup>喩、無<sup>レ</sup>平、有<sup>レ</sup>上。

護法力者、説<sup>ニ</sup>此品<sup>一</sup>。

【訓読】

嘱累品。

喩無く、平無く、上有り。

護法力は、此の品に説く。<sup>(113)</sup>

【註釈】

(113) 護法力は、此の品に説く 『法華論』卷下（大正二六・一〇頁中）。

【解説】

嘱累品では、十無上のうち第十の勝妙力無上、修行力のうち第五の護法力が説かれる。

薬王菩薩本事品

§ 23 薬王菩薩本事品

【本文】

薬王菩薩本事品。

無<sub>レ</sub>喩、無<sub>レ</sub>平、有<sub>レ</sub>上。

行苦行力者、薬王菩薩品示現。

【訓読】

薬王菩薩本事品。

喩無く、平無く、上有り。

行苦行力は、薬王菩薩品に示現す。<sup>14</sup>

【註釈】

(14) 行苦行力は、薬王菩薩品に示現す

『法華論』卷下（大正二六・一〇頁中）。

【解説】

藥王菩薩本事品では、十無上のうち第十の勝妙力無上、修行力のうち第二の行苦行力が説かれる。

### 妙音菩薩品

#### § 24 妙音菩薩品

##### 【本文】

妙音菩薩品。

無<sub>レ</sub>喩、無<sub>レ</sub>平、有<sub>レ</sub>上。

又行苦行力者、妙音菩薩品示現。

##### 【訓読】

妙音菩薩品。

喩無く、平無く、上有り。

又行苦行力は、妙音菩薩品に示現<sup>(U5)</sup>す。

##### 【註釈】

(115) 又行苦行力は、妙音菩薩品に示現す 『法華論』卷下(大正二六・一〇頁中)。

【解説】

妙音菩薩品では、十無上のうち第十の勝妙力無上、修行力のうち第二の行苦行力が説かれる。

觀世音菩薩普門品

§ 25 觀世音菩薩普門品

【本文】

觀世音菩薩普門品。

無<sub>レ</sub>喻、無<sub>レ</sub>平、有<sub>レ</sub>上。

教<sub>二</sub>化衆生<sub>一</sub>故。護衆生諸難力者、觀世自在菩薩品。又言<sub>二</sub>「受持觀世自在菩薩名号、若人受持六十二億恒河沙等諸仏名号、福德等<sub>レ</sub>」者、有<sub>二</sub>二種義<sub>一</sub>。一者信力故。二者畢竟知故。信力者、有<sub>二</sub>二種<sub>一</sub>。一者、我身如<sub>二</sub>彼觀世自在<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>異、畢竟信故。二、謂於<sub>レ</sub>彼生<sub>二</sub>恭敬心<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>彼功德<sub>一</sub>、我亦如<sub>レ</sub>是畢竟得故。畢竟知者、謂能決定知<sub>二</sub>法界<sub>一</sub>故。言<sub>二</sub>法界<sub>一</sub>者、名為<sub>二</sub>法性<sub>一</sub>。彼法性者、名為<sub>二</sub>一切諸仏菩薩平等法身<sub>一</sub>。平等身者、真如法身。初地菩薩、為<sub>二</sub>能証入<sub>一</sub>。是故、受<sub>二</sub>持六十二億恒河沙等諸仏名号<sub>一</sub>、有能受<sub>二</sub>持觀世自在菩薩名号<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>得功德無差別。

【訓読】  
觀世音菩薩普門品。

喩無く、平無く、上有り。

衆生を教化するが故なり。護衆生諸難力は、觀世自在菩薩品にあり。又「受持觀世自在菩薩名号、若人受持六十二億恒河沙等諸仏名号、福德等」と言うは、二種の義有り。一には信力の故なり。二には畢竟知の故なり。信力には、二種有り。一には、我が身の彼の觀世自在の如くして異なり無しと、畢竟じて信ずるが故なり。二には、謂く彼に於いて恭敬心を生ずること、彼の功德の如くして、我れも亦た是の如く畢竟じて得るが故なり。畢竟知とは、謂く能く決定して法界を知るが故なり。法界と言うは、名づけて法性と為す。彼の法性とは、名づけて一切諸仏菩薩の平等法身と為す。平等身とは、眞如法身なり。初地の菩薩は、能く証入すると為す。是の故に、六十二億恒河沙等の諸仏の名号を受持することと、有るが能く觀世自在菩薩の名号を受持することとは、得る所の功德無差別なり。<sup>116</sup>

【註釈】

(116) 護衆生諸難力は、觀世自在菩薩品にあり。く得る所の功德無差別なり 『法華論』卷下（大正二

六・一〇頁中）。

【解説】

観世音菩薩普門品では、十無上のうち第十の勝妙力無上、修行力のうち第三の護衆生諸難力が説かれる。

陀羅尼品

§ 26 陀羅尼品

【本文】

陀羅尼品。

無<sup>レ</sup>喩、無<sup>レ</sup>平、有<sup>レ</sup>上。

護衆生諸難力、示<sup>ニ</sup>現此品<sup>一</sup>。

【訓読】

陀羅尼品。

喩無く、平無く、上有り。

護衆生諸難力は、此の品に示現す。<sup>(17)</sup>

【註釈】

(117) 護衆生諸難力は、此の品に示現す 『法華論』卷下（大正二六・一〇頁中）。

【解説】

陀羅尼品では、十無上のうち第十の勝妙力無上、修行力のうち第三の護衆生諸難力が説かれる。

妙莊嚴王本事品

§ 27 妙莊嚴王本事品

【本文】

妙莊嚴王本事品。

無<sub>レ</sub>喩、無<sub>レ</sub>平、有<sub>レ</sub>上。

功德勝力者、妙莊嚴王品示現。二童子、依<sub>二</sub>過去世功德善根<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>如<sub>レ</sub>是力<sub>一</sub>。

【訓読】

無喩、無平、有上。

功德勝力は、妙莊嚴王品に示現す。二童子の、過去世の功德善根に依りて、是の如き力有り。<sup>118</sup>



【註釈】

(118) 功德勝力は、妙莊嚴王品に示現す。二童子の、過去世の功德善根に依りて、是の如き力有り 『法華論』卷下(大正二六・一〇頁中)。

【解説】

妙莊嚴王(本事)品では、十無上のうち第十の勝妙力無上、修行力のうち第四の功德勝力が説かれる。

普賢菩薩勸発品

§ 28 普賢菩薩勸発品

【本文】

普賢菩薩勸発品。

無<sub>レ</sub>喻、無<sub>レ</sub>平、有<sub>レ</sub>上。

護法力、説<sub>二</sub>此品<sub>一</sub>也。

法華論科文終。

【訓読】

普賢菩薩勸発品。

喩無く、平無く、上有り。

護法力は、此の品に説くなり。<sup>(119)</sup>

法華論科文終り。

【註釈】

(119) 護法力は、此の品に説くなり 『法華論』卷下（大正二六・一〇頁中）。

【解説】

普賢菩薩勸発品では、十無上のうち第十の勝妙力無上、修行力のうち第五の護法力が説かれる。